こくようのうた

柳之助

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

うたさんが鬼に殺されなかったら。

縁壱さんがささやかな幸せを手に入れることができたのなら。

その幸せが大正時代まで続いたとしたら。

目次

壱 …… 1
弐 …… 10
参 …… 22
肆 …… 36
伍 …… 48
陸 …… 61
漆 …… 73
捌 …… 87
玖 …… 101
人物紹介&呼吸 …… 113

壱

――――――父は太陽のような人だった。

旭那黒曜が生まれたのは山間の小さな農村だった。

村民の数はさほど多くはないが、小さな山を一つ越えたふもとにはそれなりに栄えた街があり、生活に不便は感じない。村人は穏やかで争いごとも、犬も食わないような微笑ましい夫婦喧嘩くらい。

明治が終わり大正となった時世。西洋の文化が加速度的に広まり、日本という国があり方を変えていく中で、時代の流れから取り残されたような村だった。

そんな村の中で黒曜は穏やかに育った。

生まれつき持つ、額や顎、腕に延びる痣。

父親も同じように、祖父も同じように、代々旭那の子が持っているものを黒曜も受け継いでいた。

父は不思議な人だった。

黒曜の持つ菱形を組み合わせたような痣とは違い、陽炎のような痣。赤みを帯びた黒髪を後ろの高い位置で一纏めにした父は穏やかで優しい人だった。いかなる時も動じ

ることはなく、公明正大、正しい在り方を極めたような人だったと幼いながらに感じていた。

母親は賑やかな人だった。

黒曜の名前は、母の黒曜石のような瞳から取られたという。息子から見ても透き通るような深みを帯びた漆黒。話すのが好きで、基本必要なこと以外話さない父に笑顔を絶やさず話し続けているのは黒曜の大好きな日常だ。

家族三人の家はさほど大きな家ではなかった。

居間は父と母、黒曜が三人並ぶのがやっとくらいの大きさで、黒曜が大人になったら困ってしまうだろうもの。

だけど、そんな距離感が黒曜は大好きだった。

『これでいいんだ、黒曜。俺はこれがいい』

赤子だった頃、父は黒曜を抱きながらそう微笑んだ。

『目の前にお前とお母さんがいる。手を伸ばせばいつだって届く距離にいる。俺はそんなささやかな幸せが、何よりも尊いと感じるんだよ』

優しい微笑みだった。

生まれて数か月頃の話だったが、今でも父の言葉はよく覚えている。

不思議な話だ。

きっと父は特別だった。

――――――父と黒曜は世界が透き通って見える。

人の体の内、血管、脳、神経、臓腑。血液の流れ、肺の膨張、心臓の鼓動、血管の収縮。人の体がどのように動くか、どのような状態なのか。

そういうものが生まれた時から黒曜には見えて、父も同じ。曰く、普通の人とは呼吸の仕方が違うらしい。実際母も他の村の人たちもそんな風には見えなかったという。

その視界の有無は大きいらしかった。

一度、三十人ばかりの山賊が村を襲ったことがあった。

だが、その三十人を父は木刀一本で、かすり傷一つ受けることなく撃退し、警察へと突き出していた。

凄いなと、当時1才だった黒曜は思った。

自分にはそんなことはできない。

1才の体では、父と同じ木刀では長すぎたのだから。

そんな体だったからなのか、父は7歳になったから頃から体の動かし方を教えてくれた。より効率のいい呼吸の方法。戦国時代にいたという旭那の家の始祖が使っていたという呼吸をより巧く、自分のものとできるように。

7才のころから一晩中野山を走り続けられる黒曜からすれば、どのような鍛錬も疲労

は感じることはなく父のできることを覚えるのが楽しかった。
　１０になった頃、一通りの動きを覚えたが、しかし父のそれとはまるで完成度が違う。
　それを凄いと言ったら、しかし父はいつものように優しく微笑み、
『黒曜、俺などそう大そうなものではないよ』
　空を見上げる。
『長い長い歴史のほんの一欠片。俺の才覚を上回るものが今のこの瞬間にも産声を上げている。彼らがまた同じように同じ場所に辿り着く。道を極めたものが辿り着く場所はいつだって一緒だ。人とはそういうものだ』
　星のようだと、黒曜は思った。
　父よりも凄い人がいるとは思えない。太陽は己の輝きに気づけていない。その熱が回り全てを照らしていることの自覚がないのだろう。
　だから、太陽の下では星の輝きは霞んでしまう。だけど、星の輝きは決してなくならないのだから。日輪の輝きには比べ物にはならないけれど、確かにそれぞれの在り方で光を生み出しているのだから。
　そして、黒曜の頭を優しく撫でた。
『お前も行ける。俺などよりもずっと先に。そのような未来を思うだけで俺はいつも浮き立つような気持ちになる』

行こうと、思った。
父と同じ場所に。父よりもさらに先の場所に。
そして、いつだって父と母の下に帰って来ようと。
父と黒曜がどこまで行っても、家に帰れば母が黒曜石のような瞳を細め、笑顔と共に迎えてくれる。どんなことをしてきたのか、どんな風に感じたのか、出かけた最中で見た景色、出会った光景。些細なことがたまらなく尊いと言わんばかりに。
母が賑やかに話し、父が優しく微笑み、そして日が落ちる頃には三人で互いに手の届く距離で眠る。朝起きればいつだって両脇に両親がいる。
愛する人が手の届く距離にいる。
それは父が何よりも尊び、黒曜も愛したもの。
それが何よりも大切な、黒曜の日常だったのだった。
だけど、人にとって大切なものを他人は容易く踏みにじることができると。
11になった日、黒曜は知ったのだ。

●

一人の青年が夜の街を歩いていた。

明かりのない闇夜の中でも解るような濡れ羽色の長髪を頭の後ろの高い位置で結い、その瞳もまた透き通るような深い漆黒。額や顎、黒の詰襟や臙脂色の羽織から延びる手の甲には菱形が組み合わさったような痣が浮かんでいた。
腰には刀。
「――――」
無言で青年はしばらく歩き続け、ふと立ち止まった。
腰に刷いた刀に手をかけ、
「星の呼吸・壱の型」
キィ、という甲高い呼吸音。
「――――明けの明星」
背後に煌くような斬閃を叩き込んだ。
静謐な一閃だった。
穏やかすらと言っていい、激しさの欠片もない、無駄が一切ない洗練された斬撃。
何もない所に叩き込んだかのように見えたそれは、
「がっ……!?」
突如、首を断たれた鬼が地面に転がっていた。
「な、何故だ……!?　俺の血鬼術で見えなかったはずなのに……!?」

頭部だけとなった鬼の顔は驚愕に染まっている。その鬼の異能、血鬼術は自分の姿、気配を完全に消すもの。鬼自体の力としては高くないが、その隠形により鬼は多くの人間や鬼殺隊の隊士を喰らってきた。

なのに、青年には通じなかった。

問われた彼は、軽く首を傾げ、

「異なことを言う。姿を消していても、お前はそこにいる。ならば斬り捨てることができない理由があるか?」

当たり前のように、異なる世界の法則でも語るのかのように。

鬼には理解できない。

あらゆる五感から外れる血鬼術にも拘らず、そこにいるから斬れるだなんて。

理解できないままに、その鬼は消滅した。

己が討伐した鬼のことなど気にも留めず、青年は歩みを再開し、

「カァー!　カァー!　星柱旭那黒曜!」

喋るカラスに視線を向ける。

闇夜から舞い降りたカラスは黒曜の肩に止まる。

「伝令!　伝令!　才館様ヨリ緊急招集!　鬼ヲ庇ウ隊士ニ関シテ柱合会議ヲ開クトノコト!」

「……鬼を庇う隊士。なるほど」

カラスの言葉に黒曜は小さく頷いた。

二十となり、成長した端正な顔立ちには微かな納得がある。

伝令の言葉に、黒曜が思い当たることがあったからだ。これはすぐにお館様、産屋敷邸へとはせ参じなければならない。

星柱・旭那黒曜。

鬼を殺す鬼殺隊の最高位柱にあって――――当代どころか歴代最強と言われる呼吸の剣士。

基本となる炎・水・風・岩・雷の全ての呼吸を収め、さらに己独自の『星の呼吸』を生み出す偉業を――――鬼殺隊入隊一週間で完遂し、齢十一ながら一月で柱を打診されるが、数年間断り続けるも、数年後あることをきっかけに柱に就任。柱であっても高い殉職率を誇る鬼殺隊においてこれは紛れもなく偉業であり異常事態。

さらには多くの隊士にそれぞれの呼吸を教えることで、隊士全体練度の底上げをし、今の柱でさえも黒曜の指南を受け自分自身の呼吸を生み出したり、自分の呼吸の技術を大きく上げたほど。

誅殺した鬼はこの八年で千を容易く超え、下弦討伐は言うに及ばず、上弦でさえも容易く首を落とす。鬼殺隊に入隊して八年間、一度も、かすり傷一つ受けたことがないと

いうのは、最早伝説だ。
しかし八年間、鬼の首魁、鬼撫辻無惨に会えないことは黒曜にとって不運という他ない。
「蝶屋敷へ寄りたかったが……終わってからにすべきか。土産は隠に頼むとしよう」
妻の顔を思い浮かべながら嘆息する。
母のように良く笑うにぎやかな彼女の下に帰るのは、黒曜にとって何よりも大切な時間なのだから。
そして空を見上げる。
旭那黒曜が会いたい者は二人。
一人は鬼舞辻無惨。
そしてもう一人は。
「……月、か」
父と母を殺した――――六つ目の鬼。
上弦の壱。
どこか自分と父に似た鬼を殺すために。
当たり前のささやかな幸せを守る為に。
旭那黒曜は鬼滅の刃を振るう。

弐

――――柱合会議は、ある種停滞していた。

鬼の妹を連れた隊士、竈門炭治郎と鬼である竈門禰豆子への処断は凡そ三つに分かれていた。

即ち、即刻の斬首かお館様の判断を待つか、静観だ。

音柱宇随天元、蛇柱伊黒小芭内、風柱不死川実弥、岩柱悲鳴嶼行冥、炎柱煉獄杏寿郎が禰豆子は即刻斬首すべきだと主張し、恋柱甘露寺蜜璃はお館様の判断待ち、霞柱時透無一郎と蟲柱胡蝶しのぶは静観。

炭治郎を鬼殺隊に引き入れた水柱冨岡義勇までもが静観しているのは、全員がどういうことかと疑問に思っていたがいつものことなので全員が放置していた。

他の柱たちが斬首だ斬首だと騒ぐ中、星柱旭那黒曜は一歩下がり、無言を貫いていた。

星柱が言葉を重ねることが少なく、柱合会議では自分から意見を発するのではなく、会議のまとめや求められた時に考えを述べるのが基本なので、そのことに疑問を覚える者はいなかった。

だから、誰も気づかなかった。

旭那黒曜が竈門炭治郎を見つめ、微かに目を見開き固まっていることに。
炭治郎も直前の鬼との戦いや混沌極まる状況で黒曜に気づくのが遅れていた。
そして、黒曜と炭治郎の視線が合い。
「――――父上？」
「――――父さん？」

●

黒曜と炭治郎の言葉に柱の全員が固まった。
それまで二人の処遇を巡り、物騒なことを騒いでいたが、完全な一時停止である。
そして、一番最初に復活したのは、
「ど・う・い・う・こ・と・で・す・か・ぁ？」
満面の笑みを浮かべた胡蝶しのぶである。
「こんなに大きい少年に父親と呼ばれるなんて一体いつこさえたんでしょうか。聞いてませんよ？　おかしくないですか？　ねぇ義兄さん？」
「……しのぶ、落ち着いてほしい」
「落ち着いてますよ？　落ち着いて義理の兄の不貞を問いただしています」

人一倍感情の起伏が激しい胡蝶しのぶである。
だからというべきか、突如降って湧いたまさかの可能性に激怒していた。
「しのぶ。聞いていたか？　確かに俺も呼んでしまったが、少年も同じことを言っただろう」
「いえ、聞いていません。そんなことよりも不倫の可能性を問いただすことの方が重要です」
反論を許さない断定だった。
完全に頭が血が上っているのを、透き通る世界から察してしまう。
「その可能性はない。俺は妻一筋だとしのぶも良く知っているだろう。ただ……彼が父上に似ていたから思わず口にしてしまっただけだ」
「はぁ？　彼が、あの？」
しのぶがものすごい訝し気な顔をし、他の柱も同じだった。
鬼殺隊の常識、というか世界の理から外れたような男である旭那黒曜であるが、彼に賛辞の言葉を述べると反応はいつも同じだ。
『俺など大したものではないよ。父上に比べれば俺は足元にも及ばない』
上弦の鬼すら容易く屠る理外の男をして、そう言うほどの傑物と竈門炭治郎が似ているなどと、誰もが信じられなかった。

全員が疑問を浮かべ、空白ができた所を炭治郎が、
「あ、あの！　すみません！　その方が俺の父によく似ていたので思わず言ってしまっただけで、他意はありません！　正真正銘炭十郎と葵枝の長男、炭治郎です！」
「なるほど。失礼した、炭治郎少年」
「いえ！　こちらこそ！」
「……はぁ。それで、旭那さんは彼のことをどう考えますか？」
額を手で押さえながらしのぶが問う。
誤解が解けたのだろう、苗字で呼ぶのは柱としての立場として話す時だ。他の柱もまた黒曜の意見を聞く気なのか、視線が彼に集まっていた。
故に、黒曜は言葉を紡いだ。
「俺は、この二人のことを知っていた」
「!?」
しのぶが目を剥く。他の柱も似たような反応で、
「どういうことですか!?　冨岡さんとグルだったというわけですか？」
「そういうことになる」
小さく頷き、
「二年前、義勇から直接相談された」

「なっ、冨岡さんが直接……!?」
「……?」
離れたとこで我関せずだった義勇が、え?　そこに驚く?　という顔でこちらを見た。
全員が無視した。
「俺も思うところはあったが、義勇が直談判で俺に意見を仰いだ。さらには元水柱、育手の鱗滝殿からも嘆願された故に静観すると決めた。鱗滝殿は思慮深く、浅はかな行動をされないお方だ」
そして、
「お館様も、静観に賛成された」
二度目、柱に驚愕が走った。
そして、
「――――お館様のお成りです」

●

お館様を交えた柱合会議は凡そ炭治郎にとって良い方に進んだ。
禰豆子が傷つけられ、不死川が流す血の誘惑に耐える、というのは不死川を知る者にとっては驚愕に値すべきことだったから。
特級の稀血であり、その香気だけで鬼を酔わせる不死川の血だ。
それに耐えうる禰豆子の精神力は、彼女が人を傷つけない証明にたり得るものだった。
故にお館様、産屋敷輝哉の採決は下った。
が、それに納得していない、認めていないものが大半だった。
確かに精神力の強さは見せたが、確実な保証でもないのは確か。ほとんどの柱にとって炭治郎も禰豆子は認められるものではなかった。
鬼撫辻無惨の頸を断ち切るという炭治郎の宣誓も、今の彼では文字通り絵空事だから。
だから、
「お館様、意見をよろしいでしょうか」
「なんだい、黒曜？」
黒曜が輝哉を見据える。
「禰豆子の精神力が確固たるものであることは証明されました。ですが、それでも柱た

ちが納得できないのも実情でありましょう。また、炭治郎が十二鬼月や無惨の頸を断つ強さを得る保証もない」

「手厳しいね。であれば、どうした方がいいかな、黒曜」

「はい」

光を宿さない、盲目の瞳が黒曜を見据える。

そして、

「竈門炭治郎を俺の継子としましょう」

言いきった。

再度、そして最大の衝撃が柱たちに走った。

それまで無関心を貫いていた無一郎でさえも驚き顔を上げた。

黒曜は誰にでも呼吸を教える。

五大呼吸の全てを収め、派生の呼吸すらも日輪刀の形状上不可能でなければ再現すらでき、指導も非常に上手な彼が教えた鬼殺隊の隊士は数えきれない。実際、現在の柱であり派生呼吸を用いる伊黒、蜜璃、無一郎の呼吸の成立に手を貸したし、しのぶの蟲の呼吸は黒曜の手助けがなければ完成度がまるで違ったとしのぶは考えているほどだった。

だが、それでも黒曜が継子を取ることはなかった。

多くの隊士が彼の継子に願い出たが、黒曜は決して受け入れなかった。
助言はできるが、誰かの師になれるほど自分は大したものではないと常々言っていた。
それにも関わらず、自分から炭治郎を継子とすると彼は言った。
そのことがどれほどのことなのか理解できない炭治郎は戸惑っているだけ。
「炭治郎」
「あ、はい！」
「俺は君を継子としたい。……無論俺など大した者ではないが」
んなわけねーだろと、全員が思った。
「君の成長の一助となることはできるだろう」
「あ、あの！」
「なんだ」
「――――継子ってなんですか!?」
誰かが噴出した。
常人離れした耳にて黒曜はそれが蜜璃だと悟ったが、それには構わず、
「そうだな。直弟子、といえばいいだろうか。日常を俺と共に過ごし、鍛錬や任務も俺と同行してもらう。無論、禰豆子も共に」

「……どうして、ですか？　どうして俺なんかを」
「……そうだな」
黒曜はその名の通りの漆黒の瞳を一度伏せる。
そして炭治郎と目を合わせた。
燃ゆる炎を思わせる赤い瞳。
それを見て、黒曜は小さく微笑んだ。
「――――君は父に似ている（太陽のような子だから）」

●

「おはよう、炭治郎君！　元気になったかしらー！　蝶屋敷へようこそ！」
柱合会議の後、先んじて蝶屋敷に送られ病室で目覚め、善逸や伊之助と再会した後、花のような笑みの女性が現れた。
長い黒髪に蝶の髪飾りを付けた隊服の女性。
どこか先ほどあったばかりのしのぶによく似ている彼女は、
「旭那カナエです、よろしくね、炭治郎君！」
「あ、はい！　よろしくお願いします！　……旭那？」

「うん、黒曜君としのぶとは会ったんだよね。嫁で姉です」
「お嫁さんでお姉さん！」
「はい！　嫁兼姉です！」
ニコーと眩しい笑みのカナエは見ていて暖かくなるが、しかし背後で善逸が血涙を流していた。
嫉妬である。
「黒曜君から継子になるかもってのは聞いているわ。だけど、しばらくは怪我の治療ね。私はここの医師なので、私の言うことは良く聞くように。いいかな？」
「は、はい！　お医者さんなんですか？　隊服を着ていますが……」
「あぁ、うん。どっちもだね」
カナエが右の拳の甲を炭治郎に向け、力を込める。
そして浮かび上がるのは、
「旭那カナエ、階級は甲よ。昔は花柱だったんだけど、黒曜君と結婚した時に引退して、前線を引いてね。今は隠の統率とこの蝶屋敷で医師を任されているわ」
「なるほど……柱だったんですか!?」
「うん。元だけどね」
柱の記憶は新しい。全員が今の自分とは隔絶した強さの匂いがした柱、元とはいえ彼

女もそうという。
「寿退柱……」
「あはは、面白い言葉ね。昔上弦の弐と戦って死にかけてね。その時に引退したの。その時に結婚もしたけど」
だって、
「黒曜君が心配だから柱やめてっていうからね――！　蜜璃ちゃんじゃないけど私もすっごいキュンと来ちゃって、私の代わりに当時甲だった黒曜君が星柱になって穴を埋めてくれて今に至ります！」
「じょ、情報量が多い……！」
元柱とか上弦の弐とか結婚とか黒曜が当時甲だったとか。
「あはは。ま、今はちゃんと体を休めてね？　暴れると物理的に私がベッドに叩きつけます。なんかよく、上弦の弐に殺されかけて私が呼吸使えないとか勘違いされるんだけど、今でも全然柱に復帰できる力量はあると自負しているので気を付けてね？」
「ひえっ……」
横のベッドで伊之助が完全沈黙しているのが急に意味深に感じてしまった。
旭那カナエ。
鬼殺隊最強の星柱旭那黒曜を夫に持ち、蟲柱胡蝶しのぶを妹とする、ある意味で鬼殺

隊で最も恐ろしい女性である。

参

「完全に回復したようだな、炭治郎」
「はい！　師範！」
蝶屋敷に併設された二つの道場、そのうちの一つ、旭那道場にて黒曜と炭治郎は木刀片手に向かい合っていた。
柱合会議のあと数週間が経っていた。
その間、黒曜は日々の任務を熟しつつ、毎日夜は帰宅しながら炭治郎の訓練を見守り、炭治郎もカナエから受ける機能回復訓練を熟し、ついにそれらを完了させていた。
「……師範？」
「はい！　カナエさんが継子であるならば師範と呼んだ方がいいとおっしゃったので！」
「なるほど……慣れぬがカナエが言うのならばそうなんだろう」
基本的にカナエの言うことは全肯定する男、旭那黒曜である。
それでしのぶが頭を痛めるまでが一連の流れ。
「全集中・常中も体得したな。良いことだ」

「はい！　カナエさんたちのおかげです、俺一人では到底できなかったかと！」
「そう謙遜するな、炭治郎であれば時間がかかるだろうがいつか一人でも至れたであろう」
「恐縮です」
　ペコリと、炭治郎が大きく頭を下げた。
　こくりと、黒曜が小さく頷いた。
「さて、これからは俺と共に任務を行うことになるが、その間時間がある限りは共に鍛錬を行うことになる。呼吸や型の矯正を実践訓練の形でな」
　一度息を吸い、
「ある程度の基礎能力を会得するまでは、鬼を殺すことよりも、戦場で生き抜くことを何よりとする。鬼に殺されれば、そこで終わりだが生き延び、情報を持ち帰ることができるのならば俺や他の柱と協力して倒すことができるから」
「なるほど！」
「よし。では始めよう」
　木刀を握り直し、対峙する。
　炭治郎は両手で握りしめ、正中線と合わせるように構え、黒曜は片手で握ったまま自然体。

「打ち込んでくるといい。遠慮は不要だ。今できる全霊を俺に見せてみろ」
「――――はい！」
返事と共に、炭治郎が飛び出す。
ビュオオ、という呼吸音。
炭治郎の用いるのは水の呼吸だと、黒曜は聞いている。
聞いている、であり実際にしっかりと見たことはない。この立ち合いは今の炭治郎の力量を図る為でもある。
飛び出しと同時に放たれたのは水平一閃。
水の呼吸、壱の型・水面斬り。
「――――ふむ」
小さく、黒曜は頷き。
「――――――――え？」
気づいた時、炭治郎は黒曜の背後でひっくり返っていた。
視界にあるのは道場の天井と黒曜の背中だけ。
何が起きたのか、まるで解らなかった。
斬りこんでいた瞬間には、既に倒れていたのだから。
「炭治郎」

「は、はい！　すみません、俺、集中しきれていなかったのか……っ」
「いいや、見事な集中と呼吸だった」
だが、
「炭治郎、水の呼吸はお前に適応しきっていないな」
「……はい、解っています。鱗滝さんにも言われました」
竈門炭治郎は水の呼吸の適正が決して高くない。
この適正というものは存外重要で、適正と練度が高ければ呼吸に応じた幻影が見えるのだが、適正と練度が低いと何も見えない。
柱であればこの幻影というものはより明確にはっきりと見えるほど。
炭治郎は幻影は生み出せるが、しかし呼吸の極みに至るほどではなかった。
「俺の日輪刀は黒刀で、どの呼吸の適正も低くて……」
「日輪刀の色は問題ではない。それを言ったら俺も黒刀だ」
「えっ、そうなんですか？」
「あぁ。が、今は置いておこう。炭治郎――――水の呼吸以外に、何か別の呼吸が使えるな？」
「は、はい！　どうして解るんですか!?」
「見れば解る」

まじか、と炭治郎は思った。
柱すげぇとも。
柱がいれば、そんなわけあるかと、全員が思っただろう。
「そ、その、前の下弦の伍と戦った時に俺の家に伝わる神楽の呼吸で、全集中の型を使ったんです。それで威力が上がって」
「なるほど。その舞いを覚えて長いのか？」
「はい、小さい頃から父に教えてもらったので。――――ヒノカミ神楽、というんですが」
「ヒノカミ」
ヒノカミ。
火の神。
――――日の神？
「何か、知りませんか？」
「いや、聞いたことはない」
ない、が。
「――――俺の、もう一つの呼吸と名前が似ているな」

●

「やっぱり私は運がいいね」
黒曜との鍛錬を終えた夜。屋敷の屋根にて全集中の呼吸を行っていた炭治郎の耳にそんな声が届いた。
声に顔を上げたが、視界にあるのは三日月だけで、
「たーんじろっ！　元気してたかな！」
背後から誰かが抱き着いてきた。
誰かは声と、何よりも匂いで分かった。
ふわりと香る石鹸のような香り。
その持ち主は、
「ま、真菰さん!?」
「やっほー」
肩まで伸びた黒髪に、青みを帯びた水晶のような瞳。隊服の上に桃色の花柄の羽織。
鱗滝真菰。

炭治郎の師である鱗滝左近次の義理の娘であり、姉弟子である女性だ。
炭治郎からすれば随分と久しぶりだ。
鱗滝の下で鍛錬をしている間、任務の合間に何度か訪れ、指南してくれていたが、最終選別突破後は会う機会がなかった。
後から聞いたのだが、水柱冨岡義勇の継子でありながらも、既にその実力は柱に匹敵しており単独の任務を多く熟している。
泡の呼吸の鱗滝真菰。
女性隊士において、実力では蜜離にも匹敵すると言われている。
「お久しぶりです！　何故蝶屋敷に？　もしかして、怪我を……？」
「あはは、怪我はないよ。炭治郎がいるって聞いたから少し寄っただけ。しのぶやカナエさんにも会いたかったしね。……まさか、炭治郎が黒曜さんの継子になってるとは思わなかったけど」
肩をすくめながら苦笑する。
「真菰さんは、黒曜さんとは知り合いで？」
「勿論。お義父さんのとこで話さなかったっけ。同い年の男の子がもう柱なんだよって」
「あ、あれって師範のことだったんですか？」

「うん、そう。あの頃は柱になった直後だったかな」
笑顔と共に小さく頷き、
「炭治郎は凄いね」
泡のように儚く笑った。
その笑みに、炭治郎の鼻が違和感を感じた。
炭治郎の知る笑みとそれは何かが違うものだったから。
「真菰さん？」
「うん？」
炭治郎が感じたその感情を言葉にするのならそれは、
「何を諦めたんですか？」
「――――」
炭治郎の言葉に真菰が目を見開いた。
数瞬、瞬きして、
「……炭治郎は凄いね」
苦笑する。
そこにあったのは先ほど感じた諦めと自嘲だ。
彼女は月を見上げて、

「私はね、運がよかったんだ」
　現れた時と同じことを言う。
「黒曜さんと初めて会ったのは私が最終選別に行く前だった。鱗滝さんのとこに来た黒曜さんが少しだけ私に指南してくれたんだ。色々教えてくれたよ。今使っている泡の呼吸もその時の指南が元だったしね」
　だから、
「私は最終選別を突破できたんだ」
　もしもと、真菰は言う。
「黒曜さんに教えてもらわなかったら。私は最終選別で死んでた。泡の呼吸のきっかけになった攻撃で、あの手鬼を殺せたけど、黒曜さんの教えがなければ私は手鬼で死んでたよ」
　運がよかったと、真菰は繰り返す。
「錆兎はね、私よりずっと強かった。……この話はしたよね？」
「……はい」
　錆兎のことは知っている。
　最終選別の為の最終試練で炭治郎に稽古をつけてくれた宍色の髪の少年。
　あの出会いがなんだったのかは今でも解らない。

真菰の兄弟子と知ったのは、最終選別直前に真菰と鱗滝に送り出された時だ。
「錆兎が黒曜さんに少しでも何か教えてもらってたら、きっと彼は生き残っていた。柱になってたと思う。実際私は柱になり切れていないし」
一度口を閉じ、
「私さ、黒曜さんに継子にしてくださいって何度もお願いしたんだ」
「そうなんですか？」
「そうなんです。私だけじゃないけどね。黒曜さんの継子になりたいって人はたくさんいるよ。でも、皆してもらえない。呼吸の指導はしてくれるけど」
俺は弟子を持つほど大した男ではない。
誰に対しても、彼はそう言っていた。
「笑っちゃうよね。黒曜さんほんと強いんだよ。前、私上弦の肆と遭遇して死にかけたことあってね」
真菰は思い返す。
全身を刀で構成した異形の鬼だった。
自身の周囲、壁や地面から自在に刀剣を生み出す空間型の血鬼術の鬼だった。対峙した瞬間、足元から刀を生み出す初見殺しの鬼。
嗅覚と敏捷性に長けた真菰だから即殺されなかった。

でも、すぐに死にかけて――――黒曜に助けられた。
あの光景は決して忘れない。
真菰が避けるだけで死を覚悟した刀剣精製を黒曜は散歩のような気軽さで回避どころか、百にも及ぶ刀剣を全て断ち切り、死に物狂いで叩き込んだにもかかわらずかすり傷しか付けられなかった鬼の頸を一瞬で断ち切った。
漆黒の、黒曜石のような日輪刀を、赫に染めて。
『星の呼吸・参の型――――瑠璃の流転』
その型を真菰は忘れない。
星の呼吸でありながらそれは――――水の呼吸の型を、全て同時に繰り出したようなものだったから。
上弦の肆を何の苦労もなく斃した黒曜を見て、真菰は悟ったのだ。
「私は百年鍛錬を重ねたって今の黒曜さんの足元にも及ばない」
それは確信だった。
物は下に落ちる。太陽は東から昇る。鳥は空を飛び、魚は水の中を泳ぐ。
生まれれば、死ぬ。
そんな世界の摂理。
世界の寵愛を一身に受けた者。

それが旭那黒曜という男なのだ。
「だから、炭治郎は凄い。そんな黒曜さんに継子として認められたんだから」
「……真菰さん」
「だから、頑張ってね炭治郎。炭治郎は強くなれる。私なんかよりも。もしかしたら黒曜さんよりも。私は諦めちゃったけど、炭治郎なら、もしかしたら」
それは身勝手な押し付けだと、真菰は思う。
あの世界の申し子より先に行けだなんて。
世界から愛された超越者を超えろだなんて無茶振りも甚だしい。
「……真菰さん」
炭治郎はその重みを確かに感じていた。
期待と諦観。自分にはできなかったことを炭治郎に託して、押し付けているのだから。
だけど、どうしても。
どうしても、炭治郎は真菰に言いたいことがあった。
失礼かもしれないけれど、
「真菰さんは、錆兎に胸を張れますか？」
「――――――――」

真菰が大きく瞳を見開き、硬直した。
凡そ、十数秒ほども停止していただろう。
やはり失礼だったと、炭治郎が焦った時、
「――――あはっ。炭治郎の言う通りだ」
真菰が柔らかく笑みを零した。
それは、さっきまでとは違う気負いのない微笑みだった。
「確かに、今の私を錆兎が見たら怒られるなぁ。こういうの、気にする口だったし。黒曜さんがどうだろうと、お前はお前のやるべきことをしろとか、言いそう。男なら、が口癖だったしね」
「あはは……真菰さんは女性ですけどね」
「おっ、嬉しいこと言ってくれるね」
にっこりと笑い、彼女は立ち上がって体を伸ばす。
そして空を見上げ、
「人は、それぞれ輝いている」
「？」
「黒曜さんが言ってたよ。聞いた時、正直嫌味かーと思ったけど、今なら、うん。受け入れられる。私も炭治郎も、黒曜さんも、それぞれ輝いてるんだから」

しかし、一度首を傾げ、
「炭治郎は星って感じじゃないか」
「えっ？」
「炭治郎は――――太陽だよ。それも優しい、暖かく周りを照らす日輪」
真菰が手を伸ばし、炭治郎の頬に添える。
どきりと、炭治郎の心臓が高鳴った。
「炭治郎はそのままでいてね？　君が君のままでいてくれるのなら私も安心だから」
真菰は泡だ。
泡はすぐにはじけて消えてしまう。
儚く脆い泡沫の夢。
けれど、太陽がその光で照らしてくれるのなら、儚い時をありったけに輝けるのだから。
うんと、彼女は小さく頷いて。
「――――やっぱり私は、運がいい」

肆

鬼舞辻無惨は己が完璧な存在であると自負している。

日光という唯一の弱点を除けば、自分は完全無欠。生物として人とは隔絶した領域にいると。

故に、鬼としてどれだけ人間を喰らっても罪の意識はない。

千年間続け、ばち一つ当たらないのだ。

それこそが無惨の正当性の証明であろう。

鬱陶しい鬼殺隊という異常者の集まりにここ四百年煩わしい思いをさせられているがそれすらも己の前では塵に等しい。

――――が、黒曜石のような痣を持つ呼吸の剣士を見た時は、背筋が凍った。

まだ十を超えた程度の少年。

当時の上弦の陸が百年ぶりに殺され、その下手人を上弦の伍に調べさせ、その眼を通して目撃した。

四百年前、己を追い詰めた花札の耳飾りと痣の剣士。あの男の耳飾りはなく、痣の形は違ったが、しかしその顔は彼と瓜二つ。

そして、その理不尽さも同じだった。
視界を繋げていた上弦の伍は、少年と向かい合った瞬間に首を落とされて死んだ。
あの時ほどに、はらわたが煮えくり返ったことはない。
耳飾りの剣士が死んだ後自分と上弦の壱、黒死牟とで彼に繋がる全てを殺しつくしたはずだったのに。数年前、最後の縁者を殺したはずだったのに。
それにも拘らず、未だに痣の剣士が残っている。
それからしばらくは鬼を強化し、少年を殺すために何体もの鬼を向かわせた。
結果は、下弦は半壊。補充した上弦の陸と伍が同時に殺された。
そこからさらに下弦と上弦を補充し、殺すために動かしたがその悉くが滅殺された。
ふざけるな。
何故十二鬼月はこれほどまでに無能なのか――――とは、無惨でさえ、言えなかった。
かつての自分でさえも耳飾りの剣士には何もできずに殺されかけたのだ。己よりもさらに下等である鬼に怒れるはずもなかった。
もし、それを理由に十二鬼月に八つ当たりを起せば、同時に自分の無能を認めることになるから。
それは無惨の矜持が許さなかった。
それから数年間はどうにかして痣の少年――――旭那黒曜を殺せないかと苦心する

日々が続いた。この千年間、これほどまでに怒り狂った日々もなかっただろう。
何度癇癪を起し、人としての住処を潰してしまったのか覚えていない。
もう少しやり過ぎれば、鬼殺隊に捕捉されていたほどだ。
そして、数年前。
上弦の弐、童磨が花柱を殺そうとし、黒曜が乱入。
童磨の頸を半ば切り裂き、動きを止め――――――止めを刺すことなく、花柱を回収して撤退した。
あれは命からがら逃げだすものの動きではなかった。
上弦の弐という、全ての鬼から数えて参番目に強い鬼すらも彼は歯牙に掛けなかった。
いつでも殺せるが、そんなことよりも花柱を助けることを優先したのだ。
即ち、童磨であっても旭那黒曜の相手にはならない。
あの耳飾りの剣士のように。
世界の寵愛を一身に受けた者。
黒死牟はそう言った。
そして無惨は悟る。旭那黒曜は紛れもなく耳飾りの剣士、継国縁壱の同類。
生命として完成された己ではあるが、彼らは文字通り世界の法則が外れた者。

生きているだけで、世界の理を乱す者。
故に――――鬼舞辻無惨は旭那黒曜に関して考えるのを止めた。
縁壱と同じように、奴が死ぬまで表に出ないことを決めたのだ。
それこそ太陽を克服するような鬼が出ない限り、鬼撫辻無惨は旭那黒曜が存命中は何もしないと決めたのである。

●

旭那黒曜は珍しく困っていた。
蝶屋敷にある自室。黒曜的に意外に思われるのだが、彼の私室には存外物が多い。
彼はすごろくや独楽、メンコのような遊びが大好きだし、趣味で音楽もたしなむ。暇があれば悲鳴嶼と一緒に吹くことも少なくない。蝶屋敷の看護婦であるすみ・きよ・なほとすごろくで遊ぶことなどしょっちゅうだ。
寝室はカナエと同じだから、ここは純粋に趣味や柱としての仕事をする為の場所である。

その部屋にて、黒曜は一人の少女と向き合っていた。
栗花落カナヲ。
黒曜からすれば義理の妹に当たる少女だ。
正確に言えば胡蝶姉妹の義理の妹なので、妻の義理の妹、というややこしい間柄だが、黒曜にとっては大切な家族である。
彼女もまた鬼殺隊の隊士、胡蝶しのぶの継子。
常に笑顔を崩さない少女なのだが、今黒曜をとても困らせていた。
と、言うのも、柱としての報告書を書いていた黒曜の下に現れ、
「義兄さん、私は今とても困っています」
「なんと」
「はい」
いつもの笑顔ではない、如何にも困っていますという顔だった。
これはいかんと、黒曜は思った。
兄として、妹の問題には全力で取り組まねばと。
上弦の鬼だろうと自然体を崩さない鬼殺隊史上最強の剣士は、妹の相談の前に珍しく身構えた。
何が来ようとも、己の全てで彼女を助けるために。

「どうしたんだ、カナヲ」
「はい」
カナヲは一度頷き、
「――――――炭治郎が尊すぎて辛いです」
「――――――うん？」
首をかしげた黒曜に構わず、カナヲが涙さえ浮かべ出す。
「炭治郎、かっこよすぎないですか？　なんなんですか彼。見てて心がほわほわし過ぎて辛いです。さっきも朝おはようの挨拶をしようと声をかけようとしたんです。毎朝一炭治郎。心の栄養は必須ですよね。でも、私から声をかけるよりも速く、炭治郎は私に気づいてくれてめっちゃ手を振って名前を呼んでくれたんです。カナヲー！　って、あのお日様みたいな笑顔で。目が良くて良かったと思います。死ぬまで絶対忘れません。炭治郎って意外にまつげ長くて、性格も顔もいいとか私殺しにかかってきてますよね」
ヒンッ、と涙をぽろぽろながらカナヲがしゃくりあげた。
感極まっているのかそのまま言葉を続ける。
「鍛錬中もかっこよすぎます。炭治郎っていつもほんと真剣なんですよね。どんな些細なことにも全力で。それなのに相手のことも気を使って。薬湯の鍛錬なんか私が濡れ

ると悪いからって頭の上に湯飲み置いたんですよ？　え？　何？　私殺しに来てる？

炭治郎の呼吸なの？　つらい、尊い」

一息で語りながら天を仰ぎ、息を長く吐きながら大きく俯いて。

「炭治郎が尊すぎてつらいです義兄さん……」

「なるほど」

黒曜が小さく頷いた。

彼にしては珍しい、聞き流しである。

栗花落カナヲ。

胡蝶姉妹が彼女を人売りから攫った時は自分では何一つできない子だったし、黒曜と初めて会った時も同じようなものだった。

何かするのにいちいち硬貨を弾いて決めてたくらいなのだから。

だが、カナエが柱を引退し、彼女とカナヲが共有する時間が増えたせいでいつのまにか心が花開いていた。

……が、それでもここまで怪文章染みた長文台詞を聞いたのは黒曜でも初めてである。

「なるほど」

二回頷いた。

鬼の首魁鬼撫辻無惨をして世界の理を乱すと言われた青年でも、二度頷かなければ飲み込めなかったのである。

つまり、

「カナヲは炭治郎に懸想していると」

「け、懸想!?」

「恋仲になりたいのか?」

「こ、恋仲!?　そ、そんな……!」

カナヲは頬を赤く染め、

「恋仲なんてそんな恐れ多い……!」

「ん?」

「私はほんと、炭治郎を眺めてるだけでいいんです。炭治郎が頑張ってる姿を陰ながら見守ることができれば満足というか、私なんかが近づくにはほんと炭治郎は尊すぎますよ!　というか恋仲になんかなかったら一日で私が尊みで死ぬ自信があります。まぁ死んでも炭治郎の尊みがあれば生き返れそうですが。炭治郎による生死の永久機関ですね。炭治郎凄い」

「……?」

「はぁー……」

言い切って、困惑する黒曜を置いてけぼりにしてカナヲは大きなため息を一つ。
「待って無理……しんどい……炭治郎が尊すぎる……」
義理の妹の語彙力が死んでいた。
「……いや、それで、カナヲはどうしたいんだ？」
「どうすればいいんでしょ……」
いや、それはこちらが聞きたいのだが。
「もう炭治郎を二十四時間影から見守るしかできない……」
「それは止めた方がいいと思うんだが……」
犯罪である。
鬼殺隊は国から認められていないし、常時帯刀していて法律を思い切り破っているがそれは多分良くない。
しかし、カナヲが炭治郎にここまでの想いを寄せるとは。
気持ちは解らないでもない。数週間、柱と継子として多くの時間を共有しているが、確かに彼は気持ちのいい少年だ。人当たりが良く、他者に真摯でもある。
父のような、太陽のような少年だと最初は思った。
だが、実際に触れあってみると少し違った。
どこか浮世離れしていた父とは違って、炭治郎は周りにいる誰かと寄り添い合い、そ

の熱を誰かに分け与えることのできる少年なのだから。
「はぁ……しんどい……無理」
が、それにしたってここまでの影響は予想外である。
吐き出す溜息と言葉が繰り返されている。
炭治郎とどうなりたいのかが、自分でも解っていないようである。
「カナヲ」
「はい……」
「正直、俺は人の感情には疎い方だと思う」
「あ、はい。知ってます」
「……そうか」
義理の妹、突然の真顔である。
少し複雑な思いをしながら、
「だが、こうしてカナエと結ばれ今俺は幸せだ。故に俺の話になるのだが……」
「はぁ」
義理の妹、あまり興味がなさそうである。
少し傷つきながら、
「俺とカナエの時は……」

「あ、義兄さんと姉さんの馴れ初めは大体カナエ姉さんから耳にタコができるくらい聞いてますのでそのあたりは省略お願いします」
「……そうか」
　義理の妹がたくましく育っていて、何故か悲しくなった。
　こほんと、一つ咳をし、
「で、あれば言うことは一つだけだ――――後悔は、しないように。伝えたい想いがあれば、伝えた方がいい」
　伝えられないことだってある。
「俺は、たまたま間に合った。だが、上弦の弐に傷を負わされたカナエを見た時は心底背筋が凍ったし、恐ろしかった。カナエが死ぬこともだが、自分の想いを何も言えずに別れることが、だ。……俺は鈍い故に、瀕死のカナエを見て、どれだけ大事なのかやっと気づけたからな」
「……はい」
「では、俺から言えるのはこれだけだ。こういうことはカナエに相談した方がいいと思うぞ」
「姉さんは無駄に盛り上げるので……」
　嫌そうな顔をするカナヲである。

最愛の妻は他人の色恋話が大好きだ。
そういうところも大好きだが。
それにしても、本当に感情豊かになったものである。
炭治郎がこんなにも愛されているとは。
しみじみと思った時、ふと黒曜は思い出した。
「そういえば」
「？」
「最近、真菰に炭治郎の様子を聞かれることが増えたが、もしや彼女も」
「ちょっと今から炭治郎に夜這いかけてきます」
栗花落カナヲ、親指を立てて良い笑顔で去っていった。
さっきまで無理とかしんどいとか言ってたのは何だったんだろうと、黒曜は思った。
というか、今は思い切り昼なんだが。
しばらく考えて、継子と義理の妹の色恋に関して、旭那黒曜は考えるのを止めた。

伍

炭治郎は悪夢を切り裂き、下弦の壱を打ち倒し。
煉獄杏寿郎はその魂を燃やして、上弦の参に立ち向かう。
その光景は、黒曜の胸を打つ。
心から、美しく、尊いものだと感じるのだ。
実力では下回るにもかかわらず、それでも大切なものの為に刀を握る。
光を認めない無明の中で、それでも輝きを失わない星々のように。
だから、旭那黒曜は己の呼吸に星と名付けたのだ。
世界は美しい。けれどどうしようもなく残酷で、誰かにとって大切なものを平気で踏みにじる者もいる。そんな世界で誰かの為の命を懸け、誰かの為に死力を振り絞れる。
そういった人々がこの世界にいるのだ。
誰にでもできるはずのことだけれど、誰にもはできない。
だからこそ、星の呼吸は既存五大呼吸を組み合わせたものなのだ。
あらゆる呼吸の基礎となる斬撃。
炎水風岩雷の呼吸を突き詰めたもの。

それらこそが旭那黒曜の星の呼吸。
道を極めた者が辿り着く場所は同じだから。
人の魂が輝く様は美しいと、黒曜は思う。
だからこそ。
その輝きを失わせないために、星柱は前に出た。

●

「破壊殺――滅式！」
「炎の呼吸――奥義・煉獄！」
上弦と柱の必殺が交差しようとする。
無限列車において、炭治郎と伊之助が下弦の壱を撃破し、善逸、禰豆子、杏寿郎が乗客を守り切ったその直後。
上弦の参・猗窩座。
決まった範囲で人間を狩る鬼の中で異例である、狩場を持たぬ鬼。
鬼殺隊ではその存在を知る者はいない。
出会った全ての隊士は、柱も含めて殺されているのだから。

そして激突する杏寿郎と猗窩座。
炭治郎たちは疲弊し最早戦えず、そもそも実力が圧倒的に足りない。
猗窩座は彼らを、人間という種族そのものを嘲笑い、杏寿郎はその弱さこそが美しいと刀を振るう。
実力は拮抗――――技量で言えば、杏寿郎の方が上だった。
旭那黒曜という、己よりも圧倒的な強者に呼吸剣技共に素直に教えを受けていてよかったと、杏寿郎は戦いながら口端を歪めた。
上弦の参、なるほど強いが――――星の柱ほどではない。
だが、それでも鬼と人間の性能の差は大きかった。
どれだけ杏寿郎が猗窩座を斬っても、すぐに回復する。
首を狙うが、異常な反応能力で確実に猗窩座はそれを防ぐ。
千日手に近い状況にも見えるが、致命傷までは行かなくても傷が増えていく杏寿郎の形勢の不利は否めなかった。
故に放つ奥義。
夜明けを待つまでは持たないが故の選択。
猗窩座もまたそれに応えるように、己の必殺を放つ。
空間を破壊するように、燃やし焦がすように、互いの必殺が放たれ、激突する――――

――――寸前。

「星の呼吸・伍の型・金剛の岩軀・袂別れ」

●

「!?」

「――――」

「し、師範!?」

突如現れた旭那黒曜は杏寿郎と猗窩座の必殺が激突する寸前、その最中に現れた。

確かに互いの技は放たれたというのに、彼は双方向へ超高密度斬撃の壁を斜めに放つことで奥義の威力を弾き逸らしていた。

出現にその場の全員は驚いたが、しかし杏寿郎のそれはすぐに微かな苦笑に変わった。

「そうか……ここまでか」

「あぁ……今のは死んでいた」

「では仕方あるまいな！　無念！」

無表情に頷く黒曜と朗らかに笑う杏寿郎。何が起きているか、見ていた炭治郎と伊之助には解らず戸惑っていた。

だが、猗窩座の反応は劇的だった。

「旭那黒曜……！」

当然ながら猗窩座もまた黒曜のことは知っている。知らぬはずがない。

多くの十二鬼月を屠り、己よりも格上である童磨すらも何もできずに倒されかけたという。そのあまりの強さから十二鬼月を始めとした上位の鬼は鬼無辻無惨から直々に接触・交戦禁止が言い渡されたほどだった。

故に、猗窩座の判断は即座だった。

踵を返して反転、鬼として最上級の身体能力で飛び上がろうとして、

「逃がさない」

「っ――――――!?」

目前に、旭那黒曜が現れ、跳躍を阻止されていた。

彼我の距離は猗窩座でも煉獄でも一息は必要だったはずなのに。それを超えて、あまつさえ猗窩座の動きを止めるように黒曜は出現していた。

「上弦の弐と戦ってからお前たち十二鬼月は、俺を見るとすぐに逃げ出すようになった。何故なのか」

「貴様……っ、今の今までどこに潜んでいたのだ……！」
「そこの森に、気配を消して。杏寿郎……他の柱と同行時に十二鬼月と遭遇した場合は俺は最初は気配を消す手はずになっているのだよ」
ここ数年、黒曜は十二鬼月と遭遇すると即座に逃げられていた。
無論、すぐに追いかけて首を落とすのだが、血鬼術の種類によっては手古摺ることが無きにしも非ずであるし、場合によっては逃亡中に人を喰うかもしれない。
また、黒曜以外の柱にとってもこの決まりは重要だった。
彼らとて柱である。だが、実力実績共に黒曜には完全に劣っているどころか、そもそも上弦とはろくに遭遇すらできない。鬼を、十二鬼月を、上弦を倒すことが柱の役目であるのに。
星柱におんぶにだっこ、という状況を柱たちは享受できなかった。
故に、黒曜と同行する柱が十二鬼月と遭遇・その可能性がある場合、黒曜は気配と身を隠し観察に徹底。柱が戦っている間に、黒曜が十二鬼月の能力を把握し、柱が致命傷や後遺症が残るような傷を受けた場合に乱入する、という決まりが出来上がっていた。
今回でいえば下弦の壱に対しては黒曜は一度も接敵せず、顔を隠し、自身の気配を極限まで抑え、炭治郎と伊之助が戦っている間も列車の守りに専念していた。
元より、下弦の壱は炭治郎に任せるつもりではあったが。

「さて……猗窩座、と言ったな」
「……っ」
緩く握った抜身の刀を自然体で持ちながら黒曜は語り掛ける。
「お前に聞きたいことがあるから逃げないで欲しい」
「……はぁ？」
訥々と戦意もなく話しかけるに猗窩座は率直に驚いた。
即座に首を落としに来るかと身構えていたのだから。
「上弦の鬼と話せる機会は少ないからな……だから、教えて欲しい」
六つ目の鬼。上弦の壱。
「――――やつはどこにいる？」
「教えるわけが……！　あの男と会ってどうするつもりだ！」
聞いていて、しかし猗窩座は微かにホッとすらしていた。
鬼無辻無惨、今出た上弦の壱黒死牟をして神々の寵愛を一身に受けたと言わせしめ、上弦を容易く屠る鬼狩り。
彼の両親は黒死牟が殺したという。
ならば何のために会うのか、なんて言うまでもない。
復讐だ。

世の理を乱す男でさえ、他の隊士と同じような当たり前の理由で戦っている。そんな些細なことが猗窩座に安堵すら与えたのだ。

なのに。

その直後、微かに首をかしげながら黒曜が発した言葉に猗窩座は愕然とした。

「話がしたい」

「――――は？」

「俺は、彼に会わなければならない。彼と話さなければならない。……そんな気がするのだ。そうしなければならないのだ」

黒曜は――――神々の寵愛を受けた青年は己の痣に手を当てながら言葉紡ぐ。

まるで、何年も、何百年も積み重ねた思いを口にするかのように。

「私はあの六つ目の鬼と会わないといけない――――そう誓ったのだ」

「――――」

ぞわりと、猗窩座の背筋に冷たいものが走った。

解らない。この男は何を言っているのだろう。話す？　会いたい？　なんだそれは。

仮にも鬼殺隊の柱と十二鬼月の上弦である。話す余地など無い。

なのに話がしたいだなんて。

何を考えているのか、意味が解らない。

解らない。
解らない。
解らない――――――解らないから、恐ろしい。
理解ができないものは、悍ましい。
「っ……！」
喉の奥がひきつるのを自覚する。
背後に下がろうとするが、黒曜の瞳が突き刺さり、それをさせてくれない。
逃がさないと、その黒曜石の瞳が言っている。
「なんなんだ貴様は……！」
何一つ、理解ができない。
今の黒曜からは闘志を感じない。力量がまるで計れない。すれ違っても、誰かいたことにさえ気づかないほどに、気配が希薄だ。猗窩座はその膨大な戦闘経験から一目見れば相手の戦闘能力が図れるが、黒曜のことはまるで解らなかった。
「……柱、なのだが。どうだろう、教えてくれないか。ここ数年、まるで手掛かりがない」
「ふざけるな！　教えるわけがないだろう！」
「……そうか」
黒曜は小さく頷き、

「では――――もういい」
キィィと、甲高い呼吸音が耳に届いた。
届いたと思ったら、背後からチンッ、とまるで刀を鞘に納めるような音も聞こえた。
そして――――猗窩座の頸が断たれていた。
「星の呼吸・陸の型・琥珀の霹靂」
型の名は全てが終わった後に。
雷の呼吸・壱の型・霹靂一閃を突き詰めたそれは音を置き去りにする。
斬られた鬼は、首を断たれ、黒曜が納刀してから、首が絶たれたことに気づく。
ダン、と落雷のような音が遅れてやってきて、首から雷霆が走ったのを猗窩座は幻視した。
――――だが。
「……驚いた」
「ぬっ……ぐっ……うぅぅ……！」
驚くべきことに、猗窩座は死んではいなかった。
琥珀の霹靂によって断たれた首は、遅れて弾き跳ぶ。それにも拘らず、頭を無理やり両手で押さえて頸と体を繋げようとしていたのだ。
黒曜もこれには驚いた。見ていた杏寿郎たちも。

頸を断たれて死なない鬼が、頸という弱点を克服した鬼を彼らは初めて見たから。
逃げなければと、猗窩座は思った。
死ぬわけにはいかないとも。
「お……おぉぉ……！」
声にならない絶叫を上げながら、ふらつく足で黒曜から距離を取る。
死なない。死ねない。まだ、頸を繋げられる。
血涙を流しながら、猗窩座は無様に、牛歩のような速度で逃げようとしていた。
「何故、そんなにも怯えている？」
「……！」
投げかけられた言葉に、猗窩座の足が止まった。
「杏寿郎に言っていただろう。鬼は強いと。人はすぐ死ぬが鬼は怪我も病も一瞬で治ると。鬼であるということは素晴らしいと、杏寿郎を誘いさえしていた」
なのに、
「今のお前はなんだ？　無様に、頸を抑えながら逃げる姿が素晴らしいのか？」
黒曜の言葉に感情はない。あるのは純粋な疑問だ。
だが、猗窩座にとっては何よりも恐ろしかった。
猗窩座に刻まれた無惨の血がよく似たような光景を映し出す。

「人間は、逃げないぞ」
そんなことに構わず黒曜は続ける。
「お前たち鬼に、お前たちの時間である夜に、限られた命で立ち向かう。それのどこが弱者だ。炭治郎を弱者と言ったな。違うと、俺は思う。彼は圧倒的強者であるお前に立ち向かった。なのにお前は勝てないなら逃げるのか？　それでは最早、弱者ですらない」
それはただの卑怯者の行いだ。
「――――」
言われた言葉に、猗窩座の時間が停止した。
その言葉と頸を断たれたという極限状態が、猗窩座の奥底から何かを引き出しかけていた。
強さに拘る、弱者を忌み嫌う、不死を尊ぶ――――その理由。
猗窩座という鬼の――――■■という人間だった頃の何か。
『■■さん』
誰かの声が聞こえた気がした。
雪のように儚い、誰かも分からない少女の笑みが視界を過ぎって。
「――――俺は、許せない。命を軽んじ、輝きを穢す者を」
キィィと、甲高い、先ほどよりもさらに大きく、深い呼吸音。

「星の呼吸・漆の型」
大上段に構えた漆黒の刀の色が変わる。
近づくもの全てを焦がす太陽な赫色へと。
「――――紫晶の輪廻」
炎の呼吸と水の呼吸。
その二つを突き詰め、窮め――――統合させた星の呼吸。
水の如き流麗さから放たれる、炎の如き剛閃。
それは断罪の刃となって、今度こそ猗窩座の頸を落とした。

陸

早朝旭那道場――――夜明け前、既に木刀がぶつかり合う音が響いていた。
「フゥウウ……！」
「コホォォ――――」
花のように舞う少女と泡が弾けるように足を運ぶ少女。
カナヲと真菰だ。
「花の呼吸・捌の型・夕立の紫陽花」
五連続で叩き込まれる上段大斬撃。カナヲの用いる花の呼吸の中で最も威力に長けたもの。
「泡の呼吸――――」
それに対し、真菰は前に飛び出し、
「肆の型・寄せる波花」
三十に近い超高速斬撃をカナヲの斬撃にそれぞれ叩き込むことで相殺した。
「っ――――」
お互いが弾かれ合うように数歩下がり、

「泡の呼吸・弐の型――廻るさぼん」
次の瞬間には真菰はカナヲの前に。
跳躍中に体を一回転させることで加速と遠心力を乗せて威力を高めた横回転斬り。
命中した瞬間に、さらに体を押し込み、
「くうっ――」
カナヲの態勢が崩れる。
その隙を見逃す真菰ではなかった。
「泡の呼吸・陸の型――溌泡美刃」
真菰の姿がブレた。カナヲの常人離れした視覚でさえ。
次の瞬間、カナヲの周囲八方向から超瞬発機動でほぼ同時に真菰が斬撃を叩き込み、
「っ……参り、ました」
滝のような汗を流し、痛みに耐えながらカナヲが降参宣言。
「コホォォ――」
そして、勝者たる真菰は長く息を整え、
「よっしゃ今日の炭治郎を起す権利は私のもの――！」
拳を高らかに突き上げた。

●

「くっ……くぅっ……！　炭治郎の寝顔……！　炭治郎の寝息……！　推しの無防備の姿を四日も見れないなんて自分の弱さに絶望する……！　私は一体どうやって炭治郎のあられもない姿を目に焼き付ければいいっていうの……!?　真菰さんは寝ている炭治郎にどんないたずらをする気なんですか！　私はとりあえず起こす前に炭治郎の服の匂いを堪能して、匂いこすりつけておきたいです！」

「うん、ごめん。カナヲ、ちょっとついていけない」

カナヲが血が滲むような声で、涙さえ流しながら床に崩れ落ち、真菰は普通にドン引きだった。

竈門炭治郎に想いを寄せる少女、二人。

以前、夜中に夜這いをかけたカナヲと夜食に誘った真菰が鉢合わせてから、二人は奇妙な絆で結ばれることになった。

炭治郎大好き、でも炭治郎に迷惑をかけない。なお、しのぶの頭痛は考えないものとする。

あの日から数日、夜分遅くに二人の少女は時に牽制、時に模擬戦、時にすごろくやメ

ンコなどの勝負遊戯を繰り広げていた。
尚、夜這いに関しては善逸や伊之助が同室だったので、流石のカナヲも最終地点まで至ることはできなかった。
『やっぱ初めては二人きりで……綺麗な満月の光が刺すような部屋がいいと思いませんか――――私ならその光があれば炭治郎の様子くっきりと目に焼き付けられるので』
『この子とんでもないな!』
炭治郎たちの部屋の前で小競り合いが繰り広げられるが、炭治郎と伊之助はしっかり熟睡していたので気づかれることはなかった。
善逸だけは全て聞いていて、寝不足に加え血涙流し過ぎて軽い貧血になったりならなかったりしたものである。
しのぶは妹のとんでもない方向性への心の暴走に、現実を直視できず考えるのを止めた。
結局、他の患者に迷惑だからと、蝶屋敷の女主人公旭那カナエにより夜間の炭治郎の部屋への接近禁止令が出されたことにより善逸の不眠貧血としのぶの頭痛は解消された。
しかし、それで諦めないのが恋する乙女二人である。
夜間が駄目なら朝から行けばいいのでは?

という理論により、炭治郎を起しに行こうという結論になったが、以前のようにどちらが起こすかでいさかいを起してカナエに怒られるのは避けたい所。
故に、夜明け前に二人は模擬戦をし、勝った方が炭治郎を起すという淑女協定が結ばれたのである。
「うぅぅ……負け越しが酷い……真菰さん強いですよほんと……」
「そりゃあ私の方が鬼殺隊長いしね。最近は黒曜さんにも稽古つけてもらってるし……ってのはカナヲも同じか。ま、経験値の差だよ」
現状十回戦えば八回は真菰が勝つ。
身体能力自体はさほど差はない、というか小柄な真菰よりもカナヲの方が体格には恵まれている。だが技量と経験値が真菰の方が大きく上だ。純粋に鬼殺隊に所属して鬼を斃した数は真菰の方が多いし、彼女は上弦との交戦経験もある。
それが階級甲でありながら、柱と伍すると呼ばれている所以でもある。
「ま、カナヲも強いよ。経験さえ積めば、多分私とあまり変わらない気がする」
「私は……！　私は今……！　私は今炭治郎の寝顔が見たいんです……！　四日……！　四日も見てないなんて……四日絶食しているのと同義……！」
「うーんブレないなーこの子」
変態に片足突っ込んだ限界オタクのカナヲと違って真菰は至極真っ当である。

伊達に交流障害、口数は少ないのに口を拓けば余計なことしか言わない男、蟲柱の頭痛と胃痛の原因の八割、と呼ばれている水柱冨岡義勇の継子を何年もしている少女ではない。

何はともあれ、

「じゃ！　今朝も炭治郎の寝顔は私のものさ！」

「くっ……これじゃあ私は――――――朝になって今から眠ろうとする禰豆子ちゃんに子守唄を歌って外掘りを埋めるしかない……！」

「無敵かな君は!?」

●

朝、ここ最近真菰が炭治郎を起こしに来てくれる。

いつ鬼殺隊の仕事をしているのかと思うが、日中や夜間のどちらかは姿を見ないこともあるのでそういうことだろう。炭治郎の師である黒曜も柱であるが必ず毎日蝶屋敷に戻ってくる。

無限列車の任務からしばらく、治療を必要としなかった善逸は任務に出ているし、怪

我を負っていた炭治郎も伊之助もほぼ全快し、何度か任務に赴いている。
昼過ぎ。
その日は珍しく同期の善逸も伊之助も、カナヲも真菰もいなかった。
指南してくれる黒曜も暇があれば手伝ってくれるカナエもしのぶも、今日は急患が多かったらしく、黒曜も治療に駆り出されて自主練の時間だった。
木刀を振るい、型を繰り返し、呼吸を深める。
旭那道場に1人研鑽を重ねる。
時間を忘れ、汗が滝のように流れるのにも気づかずに続けていて、
「精が出るな、竈門少年!!」
「わーぁ!?」
背後から轟いた巨大な声に心臓が耳から飛び上がるくらいに驚いた。
「むっ！　驚かせたようだ、すまんすまん！」
声の主は言うまでもない、炎柱煉獄杏寿郎。
羽織はないが、着ているものは隊服だ。無限列車の後、怪我の治療と任務を挟みながらも、鍛えなおしと蝶屋敷にしばらく滞在し、黒曜と鍛錬を重ねていた。
「任務ですか？」
「あぁ！　というか、そろそろ本格復帰しようと思ってな！　お館様に頼み込み、鍛錬の

時間を確保していただいたがそろそろ限界であろう！　これから蝶屋敷を出て、そのまま任務に復帰する！」
「なるほど！　お疲れ様でした！」
杏寿郎の大きな声につられて、炭治郎の声も大きくなる。
「うむ」
杏寿郎は小さく頷き、
「竈門少年、一度座るといい」
「あ、はい」
促され、炭治郎は杏寿郎の前に正座する。杏寿郎も同じく姿勢よく正座にて向き合った。
「竈門少年」
「はい」
「君は焦らなくてもいい」
「――――」
静かに告げられた言葉に、炭治郎の目が見開かれた。
「……気づかれて、いましたか」
「あぁ。というか、黒曜の鬼殺を見た者の反応は君のように焦り限界を超えて鍛錬をす

るか、諦めるかの二択だからな」
俺もそうだったと、鬼殺隊の柱は言葉を漏らす。
「煉獄さんも……？」
「うむ！　俺よりも年下の子があれだけ強いのだ！　焦燥に駆られないわけがなかっただろう！　煉獄家は代々柱を担っているのに、俺は彼に稽古で一本も取れない！　思うところはあった！　稽古をし過ぎて体を壊したこともあったしな！　竈門少年！　黒曜から伝えられた自己鍛錬表以上にやっていないか！　あれは君の今の体を考えて組まれたものなので、過剰にやると逆効果だぞ！」
「おぉう……」
炭治郎が頭を抱えた。
まるっきり図星であった。
杏寿郎はしかし、優しく笑みを浮かべ、
「竈門少年、君は君だ」
焦りを抱えていた少年へ伝えねばならないことを伝える。
「君は強くなる。あの黒曜が認め、継子としたのだから。君は十二鬼月を、無惨を倒すことを誓ったのだから。君は悲しみの連鎖を断ち切ると吼えたのだから。君は、君なりの歩みで強くなれる」

そして、
「俺は、君と君の妹を認める」
だって、
「黒曜の背を追う君を俺は見た。人々の為に戦う竈門少女を見た。任務の始まり、俺は君のことを信じていなかった。信じていたのは君を信じていた黒曜だった」
だけど、
「俺は、俺が見た君たちを信じる。君たちは立派な鬼殺隊の隊士だ」
「――――――あ」
ぽろりと、炭治郎の瞳から涙が零れた。
暖かい言葉が、炭治郎の胸に種火となって灯る。
杏寿郎は願う。いつかその種火が大きな炎となることを。
炎の柱は、日輪の少年へ想いを伝える。
「君と俺が追う背中は遥か遠い。万か、億か、それ以上か。果てしない道のりだ。だけど――――俺たちは、確かに高みへ歩いているのだ」
その為に。
男は少年の胸に指を付きつけ、
「――――――心を燃やせ」

●

「ありがとう、杏寿郎」
道場を出て、荷物を纏めて蝶屋敷を一人出ようとした杏寿郎に声をかけたのは黒曜だった。
「うむ？　もう手当てはいいのか？」
「あぁ、落ち着いた。……先ほど、炭治郎を励ましてくれていただろう」
「あぁ！　あれか！　聞いていたのか、それは恥ずかしいな！　余計なことを言ったかもと、少々心配していたのだが！」
「とんでもない」
黒曜は目を伏せながら首を振る。
「あの言葉は、俺には言えなかった」
炭治郎に焦りがあったのは黒曜も気づいていた。
焦るなと、言うのも簡単だった。
だが、きっと黒曜が炭治郎にそう言っても、逆に焦らせるだけだっただろう。

そういう隊士を、黒曜は見てきたのだから。
「だから、感謝する。杏寿郎」
「よもやよもや！　そんなことは感謝されることのほどではない！　俺が黒曜にしなければならない感謝の方が多いからな！」
「そうか？」
「そうだ！」
炭治郎にも言ったが杏寿郎だって、黒曜の強さに思うところはあるのだ。
だけど、結局の所焦っても、折れても仕方がない。
煉獄杏寿郎が自身の責務を全うすることには憧れも嫉妬も、挫折も関係ないのだ。
「俺は心を燃やし――――鬼を狩る。戦えない人々を残酷から守る。そうだろう、星柱」
「――――ああ、そうだ。そうだな、炎柱」
黒曜の痣を持った青年が目を細め、微かに、しかしはっきりと笑う。
「それこそが俺が玉のように輝く星と仰いだ光だ」

漆

――――――夜空を満月が照らしている。
上弦の陸・堕姫と妓夫太郎。
上弦の伍・玉壺。
上弦の肆・半天狗。
上弦の参・猗窩座。
十二鬼月、その半分以上が既に斃されていた。
手強かったと、黒曜は蝶屋敷の縁側で記憶を反芻する。上弦の伍は霞柱である無一郎が単騎で倒し、参の猗窩座も黒曜一人で斃せたが、他の二体はそうもいかなかった。
堕姫と妓夫太郎の二体は兄妹の首を同時に断たねばならなかった。
半天狗は戦っている鬼ではなく巧妙に隠れる本体を断たねばならなかった。
黒曜の物理的な戦闘力がどれだけ高くても倒せない、そういう鬼たちだった。加えて、その二体も黒曜を見るなり逃亡することは解っていた。
特に上弦の陸は厄介だった。
二体のうちどちらも逃がさないのは難しく、同行していた宇随天元、炭治郎、善逸、伊

之助がいなければ斃せなかっただろう。また上弦の肆にしても戦闘能力の高い半天狗の分身体を放っておけば刀鍛冶の里を壊滅し、刀鍛冶たちを皆殺しにしかねない故に足止めは必須だった。

結果的に。

堕姫を善逸と伊之助が、妓夫太郎を天元と炭治郎が位置取りを調整し、平面上に十間（20メートル）――――黒曜が上弦の首を落とせる最大距離に誘導し、『星の呼吸・肆の型・翠玉の風斬・周断ち』、広範囲円環状斬撃に同時に首を落とし。

半天狗・憎珀天を黒曜が足止めをし、その間に逃亡する本体を蜜璃、炭治郎、禰豆子、不死川玄弥が追跡、蜜璃がさらに分身した一体を倒し、最後に残った本体を炭治郎が首を落とした。

そして――――竈門禰豆子が太陽を克服した。

鬼殺隊と鬼の戦いに起きる明確な変化。

全国各地の鬼の活動が鳴りを潜め、最後の戦いが迫っている。

その中で行われる柱稽古。

黒曜が担ったのは呼吸の矯正。

各地の柱稽古の最中に、隊士が黒曜の下に訪れ強化された肉体と呼吸のズレを修正する。必要があれば呼吸を派生させることもある。

また蝶屋敷ではしのぶの柱稽古も行われており、戦闘中における応急処置や救命を体系化し伝えている。
満月を、黒曜は眺めていた。
「黒曜君」
「……カナエ」
縁側で一人月見をしていた黒曜に声をかけたのは寝間着姿のカナエだ。
柔らかく微笑んだ彼女は、お盆に湯飲みを二つ乗せたものを持ち黒曜の隣に腰かける。
「すまない、起こしたか？」
「くす、急に布団の中が寒くなったから驚いちゃったわ。……眠れないの？」
「あぁ」
頷き、月を見上げる。
寝間着姿のカナエと違い、黒曜は隊服と臙脂の羽織に身を包んでいた。
傍には日輪刀が。
それらを眺めて、カナエは仕方なさそうに苦笑する。
黒曜の肩にもたれかかり、
「何を悩んでるの？」

「……」

問われ、少し間を置き、

「俺は、これまで一体何を成せたのかと」

「私の命を救ってくれたわ」

即答だった。

上弦の弐、童磨にカナエは殺されかけた。たまたま近くにいた黒曜がいなければ死んでいただろう。

あの時のことを、旭那黒曜は一生忘れないだろう。

きっと、人生で最も黒曜が恐れ、焦った瞬間だった。

「……君は、変わらないな」

旭那カナエは出会った時から、ずっと変わらない。

初めて出会った時は能天気な少女だなとしか思えなかった。

たまに任務が同じになる子、他の者と変わらず呼吸の指南をした少女。

他の者と違ったのは、胡蝶カナエが旭那黒曜を特別と思っていなかったことだ。

大体のものは黒曜を知れば、焦るか折れるかの二択だ。

その焦りを決意に変えるものが炭治郎や杏寿郎、柱たち。

折れたが、しかし落としどころを見出したのが真菰。

けれど、カナエはどちらでもなかった。
普通に話しかけてきて、普通に笑いかけてきて、普通に食事をして。
カナエは感情が豊かな、良くしゃべる子だ。怒る時は怒り、笑う時は笑い、悲しむ時は悲しみ、楽しむ時は楽しむ。喜怒哀楽を全身で表現し、いつだって思いっきり。
それが、黒曜にとっては何よりも眩しかった。
黒曜は感情の起伏はあまりないし、どこか糸が切れた凧のように浮世離れしている。
柱に推薦され続けたが、その気はなく、大半の隊士には距離を置かれていた。
その距離をまるで感じないというように、カナエは黒曜に笑いかけてきてくれた。その度にしのぶが怒っていたのは懐かしい話だ。
「正直、昔は困惑していた。この少女は何を思って俺に話しかけてきているんだろうと。俺に話しかけてきて、何が楽しいんだろうと」
「いや、黒曜君結構面白いわよ？　天然だし」
「え……そう、なのか？」
「うん、そういうところ」
そうだったのか……と真顔で受け入れる黒曜に、くすくす、とカナエは笑う。
その笑みが、黒曜が好きだった。
いつも、その笑みで黒曜に笑いかけてきてくれたから。

浮世離れし、人との交流を持とうとしない黒曜にとっては唯一といっていいほどに温かみのある繋がりであったし、カナエと友人として仲を深めてから、話しやすくなったと言われることがあった。

だからこそ、上弦の弐に襲われたと聞いた時は怖かった。

あの笑みが、ささやかな彼女との時間を失うかもしれないから。

上弦の弐を殺しきらず、カナエの救命を優先したのもそれが理由だ。

失いかけて、自分の中でカナエがどれだけ自分にとって大きいのかを自覚して、婚姻を申し出たのだ。

思えば、お付き合い期間無しの即結婚だ。

そして思い返せば、

「カナエ、君と結ばれたことは俺の人生において何よりの幸いだった」

「……えぇ、私も。黒曜君と出会って、本当に幸せよ」

肩に掛かる彼女の重みと温もり。

「カナエ」

「はい」

「俺は……怖いんだ」

半身に大切なものを感じながら、黒曜は思うものを素直に吐露する。

「無惨との決戦は近い。俺はきっと、アレを倒すために特別強く生まれてきたんだと思う。なのに、これまで一度も対面していない。一度も会えないんじゃないかとすら思うんだ。上弦たちも、ここ最近は俺一人では倒せなかった。まともに戦うことすら放棄されただろう」

だから、怖い。

旭那黒曜は、誰よりも強いけど。

それでも、誰もを救えるわけではないのだから。

「怖いんだ。俺の手の届かないところで、誰かの輝きが失われてしまうことが。君の時は間に合った。でも、次だって、いつだって間に合う保証はない」

もしも。

もしも、黒曜の手の届かないところで、黒曜にとって大事なものが、黒曜が愛する輝きを持つものが失われてしまったら。

自分の手が届けば救えたはずのものが救えなかったら。

そう思うと、黒曜は怖くてたまらないのだ。

「俺は人より強く生まれたが、しかし何かを成せる人間なのだろうか。外れた者と言われながら、しかし俺はただできることをやっただけだ。できないはずのことを成し遂げようとし、成し遂げるものこそ称賛されるべきではないのだろうか」

「今日は黒曜君暗いわねー！」
「……」
旭那黒曜の人生におけるもっとも深刻な悩みが、暗いの一言で笑顔と共に流された。
カナエは立ち上がり、黒曜の正面に立つ。
両の手で、彼の頬を包み、
「それがどうしたの、黒曜君」
厳しい言葉を、優しさに満ちた言葉で告げる。
「貴方は鬼殺隊を支える柱なんだから。どれだけ悩んでも、それでもやることは、やらなければならないことは変わらない。貴方は、貴方の役目を果たして」
こつん、と互いの額を重ね合わせる。
「……カナエ」
「悩みも弱音も、貴方の弱みも私が全部受け止めるから。だから、頑張って」
「……君には、敵わない」
伝えられた言葉と温もりに、黒曜の恐れが霧散していく。
黒曜が悩みや弱音を言える相手なんてこの世にカナエだけだ。他の誰かにこんなことを言っても、考えすぎだとか、お前が言うなとか、また謙遜かと、流されるだけだ。
カナエだけが正面から受け止めて、受け入れてくれる。

「当然、妻ですので。旦那を支えるのも妻の役目でしょう」
「あぁ……」
カナエの言葉を噛みしめるように頷き、
「君と結ばれたことは俺の生において何よりの幸いだ。ありがとう、カナエ。俺と一緒になってくれて」
「私こそ。私の命を救ってくれて、一緒になってくれてありがとうございます。言ったでしょう？　黒曜君は私の命を救ってくれた。貴方が何かを為せるか迷い不安になったとしたら、私を見て？　貴方が、貴方でなければ救えなかった私が、貴方の為したことの証明よ」
月を背に、カナエの笑みが花のように綻ぶ。
彼女は額を黒曜から離し、
「ここで、黒曜君に発表があります」
「……？　どうした、改まって」
「はい、実はですね」
一つ、息を整えながら――――自分のお腹に、手を当てた。
「――――赤ちゃんができました」
「――――」

「一昨日、しのぶに言われたの。まだお腹が大きくなるのは先のことだけれど」
「――――」
「黒曜君をびっくりさせたくて、何時言うか迷ってたんだけど……今言っちゃいました！」
「――――」
「黒曜君？　……わっ!?」
黒曜がカナエに飛びつくように抱き着いた。
その抱擁は痛いくらいで、
「――――ありがとう」
黒曜はぽろぽろと涙を流していた。
一瞬、彼女は薄紫の瞳を見開いたが、すぐに抱きしめ返し、
「……もう、びっくりしちゃったわ」
「俺の方だ。本当に驚いた。人生で一番驚いた。……本当なのか」
「うん、本当。貴方と私の子よ」
「そうか……そうか」
ぎゅっ、と。カナエを抱きしめ、首筋に顔をうずめる。
花のようなカナエの香り。

「俺に、子供……俺が父親」
「えぇ、そうよ。私ね、子供ができたって聞いてた時思ったの。無惨との戦いが迫っていて、大変だけれど」
もしも、次の戦いで無惨を倒すことができたのなら、
「――――生まれてくるこの子は、鬼がいない世界で生まれてくれるの」
「あぁ……それは」
黒曜は未来を想う。
自分の子が、大切なものを踏みにじる者がいない世界に生まれ、健やかに育ってくれることを。
「それは、なんて素晴らしい――――」
未来だ。
幸いに満ちた、誰もが望む明るい世界。
「黒曜君」
「あぁ」
「だから――――ちゃんと、帰ってきてね？」
「――――あぁ」

●

――――夜空を満月が照らしている。
誰もいない野を黒曜は一人歩く。
一瞬、雲が月を隠した。
そして、次に晴れた時、
「――――あぁ」
足を止めた黒曜の先に――――六つ目の鬼が佇んでいた。
その六つ目は全てが黒曜に注がれ、真ん中の段の両目に刻まれているのは上弦の壱。
十二鬼月、最強の鬼。
かつて、黒曜の両親を殺した鬼。
ずっと、ずっとずっと、黒曜が会いたかった者。
きつく結ばれた六つ目鬼――――黒死牟の口元。まるで何か耐えがたいものを無理やりせきとめているかのように。
黒曜は、彼に話しかけようと口を開こうとし、
――――背後に音もなく忍び寄っていた上弦の弐の首を落とした。

「――あれ、おか」
「黙れ、死ね」
おかしいな、完全に気配を消していたのに。
そんなことを言おうとして、しかし一言すら許さないと言わんばかりに黒曜の赫刀が閃いた。
頭部を含め、全身が一瞬で百四十八分割。
ばらばらの肉片となり――――キィィィ、という甲高い呼吸音。
「星の呼吸・弐の型・紅玉の煉獄」
灼熱の炎の如き斬撃が、その肉片を残らず蒸発させ――――上弦の弐・童磨は消滅した。
旭那黒曜という男にしては極めて稀な、絶殺の意思。一秒も生存すら許さない絶対零度の怒りを込めた鬼殺。
かつて、妻であるカナエを殺しかけた鬼の生存を、黒曜が許すはずもなかった。
「――――ふう」
上弦の弐を消滅させ一息ついた黒曜は改めて黒死牟と向き合う。
同僚が一瞬で殺され、黒死牟の表情は歪んでいた。
しかしそれは童磨が殺されたことではなく――――殺しきった黒曜の手際に向け

られた感情だった。

そして、旭那黒曜は万感の想いを以て、黒死牟へと言葉を発した。

「お会いしとうございました――――――兄上」

捌

「状況が変わった」

残された上弦の壱と弐、黒死牟と童磨を呼び出し、鬼無辻無惨はそういった。

「太陽を克服した鬼が――――禰豆子が現れた。故に、アレを確保せねばならない。だがその為には旭那黒曜が邪魔だ」

だが、と無惨は胡乱げに続ける。

「もはや私はお前たちが旭那黒曜を殺せるなどと期待していない」

上弦すらも残すは二体のみ。

黒死牟と童磨が黒曜を倒すことなんてそもそも思っていない。

故に、

「少しでも手傷を負わせて来い。腕の一本落とせれば十分だ。私がお前たちに期待するのはその程度だ」

そう言われ、黒死牟と童磨の運命は決定した。

黒曜をおびき出すまでもなく黒死牟の前に現れ、その背後を童磨が気配も音も、存在すら消して接近し――――一瞬にて消滅させられた。

そして、向き合う旭那黒曜。
――――顔を見るだけで、腸が煮えくり返りそうだった。
黒死牟の弟――――継国縁壱。
己と瓜二つの顔、しかし生まれつき持つ陽炎のような痣。
世界の寵愛を一身に受けた者。ただそこにいるだけで世の理を乱す男。
その生涯において、鬼無辻無惨でさえもかすり傷一つ付けられなかった真正の化け物。
黒死牟が鬼になってから――――一度も会うことはなく、痣者故に二十五を迎え死んだと思っていた。その後も、無惨と黒死牟とで彼にまつわる全てを殺したというのに。
九年前にも、瓜二つの男と出会った。
その男は日輪刀を持たず、剣士ではなかった
ただの木刀故に殺されることはなく――――しかし、手も足もでなかった。
庇っていた妻と子を狙い、その犠牲となって男は死んだ。妻も一緒に死んだ。
息子だけが生き延びた。
そして今、黒死牟の前に。
「お会いしとうございました――――兄上」

言われた言葉に、即座に黒死牟の怒りは頂点を迎えた。
「ホォォ……！」
呼吸は全集中。
鬼でありながら鬼狩りの呼吸を用いる異端にして頂点の鬼。
「月の呼吸：拾陸ノ型：月虹・片割れ月――――！」
即座に放たれる月の呼吸最大規模。降り注ぐ五つの大斬撃に、付随するような三日月型の小斬撃。不規則に舞うそれもまた当たり判定が存在し、並みのものでも、初見であれば柱でさえも無傷で済むことは決してない。
「――――」
なのに、黒曜には掠りもしなかった。
「……縁壱ぃ！」
呻くような怨嗟の声。
噴火の如き怒りは収まらない。
「拾肆ノ型：兇変・天満繊月……！」
視界を埋め尽くすように、折り重なった斬撃が放たれる。
これもまた大斬撃に三日月状の斬撃が織り交ざったもの。
なのに、黒曜には掠りもしない。

「っ……！」

声にならない。

腸が煮えくりかえる。

怒りで脳が沸騰する。

四百年だ。

四百年もの時を研鑽に費やしてきた。痣を発現し、透き通る世界に入門し、家庭を棄て、かつて仲間だった者たちを斬り捨て、人であることさえも辞めて鬼となった。

なのに、たった二十年ほどしか生きていない旭那黒曜にはかすり傷さえ与えられない。

「なんなのだ貴様は！」

吐き捨てるような言葉があふれ出す。

「貴様のような男が何故生まれてきた！　何故貴様のような者の存在が許される！　お前のような、生きているだけで世界を乱し、他者の研鑽を無為にするものが！　何故四百年経っても生きているのだ！　縁壱、縁壱、縁壱ぃぃぃぃ!!」

癇癪染みた憤怒と共に刀が形を変える。

それまでの通常の刀から、三叉の刃。それはさらに型の攻撃範囲を広げる黒死牟の血鬼術。それにより型を連続して繰り出すが、しかし結果は変わらない。

赫刀で防ぐこともすらない。ただの体捌き。
大人が棒きれを振り回す子供を歯牙にもかけないように。
三日月の刃が舞う中で、しかし黒曜は常と変わらなかった。
否、いつも以上に感情を感じさせない無表情で、
「――貴様、痣が……！」
額や顎、腕の痣が――――形を変えていた。
菱形を重ねたようなそれから、陽炎のような、炎のような痣。
継国縁壱のそれと同じように。
「何故だ……！　縁壱、何故貴様は――――！」
「兄上」
「っ――――」
言葉に、黒死牟が硬直する。
痣の青年が口にしたのは、
「――――何故、このようなもので戯れをされるのですか」
怒りと嫉妬で発狂するのを黒死牟は自覚した。

●

狂気じみた執念と共に三日月の斬撃が黒曜に降り注ぐ。
だがそれは黒曜からすればそよ風に等しいものだった。
やっと出会えた黒死牟に、黒曜は奇妙な感傷に陥っていた。
懐かしい。そして愛おしい。
そんな気持ちが、胸の奥からあふれてくる。
どこから来るのか解らないが、しかし確かにそう感じていたのだ。
兄上と、自分は彼のことを呼んだ。
黒曜に兄はいない。だが、そう呼んだ。
自分ではない誰かが、自分の口を介して想いを伝えているかのように。
黒曜のものではない誰かの記憶を元に、黒曜ではない誰かが黒死牟へと話している。
それに対して、違和感も嫌悪感もなかった。
そうしなければならないとさえ、思った。
自分はこのために生まれてきたと、思うほどに。
旭那黒曜は――――この瞬間の為に生まれてきたのだ。
「――――キィイ」
呼吸を深める。

初めて、黒曜が刀を構えた。

「……！」

黒死牟もまた身構え、月の呼吸による斬撃の雨を叩き込み、

「星の呼吸：玖の型――――」

赫刀が閃いた。

「――――黒曜の星辰」

それは剣技における究極系。

炎のように激しく。

水のように柔らかく。

風のように鋭く。

岩のように堅く。

雷のように速い。

ありとあらゆる剣術という概念の究極系。世界に愛されたとさえ言われる男が突き詰めた人という種の終着点から放つ至大至高の一閃だった。

「――――」

斬撃時間は刹那以下。

黒死牟が気づいた時にはもう、彼自身の首は断たれていた。

そして十二鬼月は全滅し――――

「――――ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

――――それまでで、最大規模の月輪が黒死牟を中心に発生する。

それを当然のように避け、見た先に、

「ヨリ、イチ……!」

化け物が、そこにいた。

六つ目は変わらず、しかし肉体はまるで別物に。背から四本、わき腹から二本づつ甲殻類染みた手が生え、顔面には異形の角と牙。

まさしく異形の鬼。

それまでの黒曜と似ていた端正な顔だちなどなく、人から外れた化け物の名に相応しい姿だった。

絶ったはずの首は、繋がっている。

「ヨリイチ……!　貴様ニ、貴様ニハ……!　俺ハ……!」

足掻くように。

首を断たれて尚、死を認めぬと言わんばかりに黒死牟は吼える。

その様を。

その在り方を見て――――気づかぬうちに涙が零れた。

「――――おいたわしや、兄上」

日ノ本一の侍になるのではなかったのですか。
だから私は日ノ本で二番目の侍になろうと思ったのに。
優しく、強い兄上はどこに行ってしまったのですか？
そんなにまでなって、負けたくなかったのですか？
そんなにまでなって、死にたくなかったのですか？
そんな侍とかけ離れた化け物になってまで。
兄上、兄上、兄上――――。
「――――ヤメロ」
そんな言葉を、黒死牟は聞いた気がした。
黒曜に被る縁壱。たった一人の弟。
憎くてたまらない、血肉の片割れ。
四百年前に訣別し、死んだはずなのに。
今なお、亡霊となって己の前に立つ。
悍ましくて、気持ち悪くて、妬ましくて――――羨ましくて、たまらない。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
大気を震わせる咆哮。
それにさえ月輪が弾け、疾走もまた一歩踏み出すことに暴虐となって三日月の斬撃が吹き荒れる。
「――――」
そして。
その様を見て。
――――旭那黒曜の呼吸は完成した。
「旭の呼吸――奥義」
額の痣が明確に菱形を刻む。
日輪刀の赫はより色を深め、天照す光のように。
「――――曙光の戯れ・童唄」
断ち切ったと、黒曜は思った。
成し遂げたと、黒曜は思った。
生まれて初めて感じる達成感。
何事かを成し遂げたという自覚。
その感覚は違うことなく――――異形となった黒死牟の首を、今度こそ落としてい

た。

「――――よ、り……いち」

塵となって消えていく黒死牟の下に跪く。

彼に、言わなければならないことがあったから。

鬼となった彼を止め、ただ一言いうためだけに。

この痣は、この記憶は、四百年間受け継がれてきたのだから。

「兄上」

やっと、言える。

多くのことがあった。

多くのものを失った。

だけど、

「あの日……笛をくださってありがとうございました。遊んでくださってありがとうございました。私にとっては、あの日々は掛け替えのない輝きでありました」

「――――」

崩れ行く中、黒死牟が信じられない物を聞いたかのように目を見開いた。

笛、というものが何なのか黒曜には解らなかった。

だけど、父も、祖父も。旭那の家では代々生まれてくる子には父親が手彫りの笛を彫

る風習があった。
つまりは、そういうことなのだろう。
時代が流れても、変わらないものがあったのだ。
「より、いち」
黒死牟の瞳から涙が溢れた。
その涙が、なんなのか黒曜には解らない。
「わたしは、おまえに――――」
そうして、上弦の壱黒死牟。黒曜の祖先、継国厳勝は消滅した。
塵となって消えていく様を見て、再び、最後の涙が黒曜の瞳から流れ落ちた。
「――――？」
黒死牟を、上弦の壱を、最後の十二鬼月を倒して、黒曜は――――膝から崩れ落ちた。
「はぁっ……はぁっ……？」
呼吸が乱れる。
指一本動かない。
全身が硬直し、言うことを聞かない。
旭那黒曜にとってそれは初めての体験だった。初めての体験に理解が追い付かず、刀

さえも握っていられなかった。

「あ――――」

口すら、まともに動かない。

隊服の中が何故か湿って不快極まりない。

汗を大量にかく、ということさえ黒曜には初めての経験だった。

黒曜は気づかなかった。

――――己の額から菱形の痣が消えていることに。

まるで役目を果たしたと言わんばかりに、壁を超えたものの証は消失していた。

視界が狭窄する中、彼の意識が消えていく。

消える中、最後に過ぎったのはこれまで出会い、黒曜が星の輝きと尊んだものたちであり。

「――――カナ、エ」

最愛の女性と、いつか生まれてくる子供の姿だった。

●

数日後――――――――鬼殺隊に星柱が死んだ、という情報が駆け巡った。

玖

――――――緊急の柱合会議が開かれた。
産屋敷邸に集まった柱たちの空気は重い。
何故ならば、此処に集まった柱たちには会議の内容に心あたりがあったからだ。
星柱旭那黒曜の死亡。
ここ二週間ほど流れた噂。
常であれば柱たちの誰もが下らない噂であると聞き流したであろう。
だが、その二週間、柱稽古を行っている隊士たちから旭那黒曜を見たというものが一人もいなかったという点、さらには実際にこうして柱合会議が開かれている点。
この二つの事実が、もしや、という思いを柱たちは覚えていた。
ありえないと、誰もが思う。
旭那黒曜の埒外の強さは柱たちこそが知っている。現役の柱は黒曜に教えを受けたものも多く、戦場で肩を並べた数も数えきれない。
多くの隊士を支えた、文字通り大黒柱。
黒曜は助けがなければと言っていたが、ほとんど一人で十二鬼月を壊滅させたような

ものなのだから。
そんな男を失う。
それは鬼殺隊が被る影響が計り知れない。
現状、黒曜死亡の噂はそれぞれの柱がせき止めているが、人の口に戸は立てられない。
誰も詳細の情報を持っていないが故に、口は閉ざされ、
「――――お待たせしました、皆さま。当主代理、あまねでございます」
産屋敷輝哉の妻、あまねが入室した。
彼女への挨拶を最初に発したのはしのぶだった。
あまねへの挨拶と輝哉への言葉を述べ、そして白髪の少女が口火を切る。
「本日緊急の柱合会議を行うのは他ではありません。皆さまに通達しなければならないことがあります」
彼女は一度、柱たちを見回し、
「――――星柱様の欠員」
その事実を言葉にする。
柱たちの体が硬直する。
「それは……事実、なのですか」
行冥が数珠を鳴らしながら問う。

そこに表情はなかった。
「はい。当主も確認し、正式に星柱という柱は鬼殺隊から除籍されました」
「――――」
ぐしゃりと、数珠が一つ潰れ、光を映さない目から涙が流れだした。他の柱たちもまた涙を滲ませる者も、呆然とする者も。
「また星柱殿は上弦の壱、弐を討伐されているのでこれで十二鬼月は壊滅した模様です」
続く、あまねの報告もまともに入ってこない。
それほどまでに星柱の欠落は大きかったから。
だが、しかし、続く言葉を無視できなかった。
「――――続いて、新たな柱の就任を報告させていただきます」
「……!?」
あまりにも性急すぎる、そう誰かが言おうとした。
黒曜の後釜に座れる力を持つものなど、今の鬼殺隊にはいないというのに。
そんな無理な穴埋めをしたところで意味はないから。
「どうぞ」
だが、誰も止めるもなく――――襖が開かれた。
「――――は?」

漆黒の瞳と、後頭部の高い位置で結った同色の髪。
着込んだ黒の隊服に、それよりも深い濡れ羽色の羽織。
全身黒づくめの青年。
その額と顎に痣はなかったけれど――――その場にいる全員が知っている男だった。
「旭那様」
「はい」
襖の外から青年は――――黒曜は一度、深く頭を下げ、
「旭柱・旭那黒曜だ――――改めて、よろしく頼む」

●

「……で、どうなったんですか？」
蝶屋敷の縁側、羽織を変え――――痣を失った師に炭治郎は問う。
シャッシャッ、と小気味のいい音が隣から響く。
黒曜は細長い木の棒を小刀で削り、何かを作っていた。
手は止めず、視線はそこに向けたまま、

「質問攻めになったよ。生きてたのかよとか死んだんじゃねーのかよ、とかそういうことだ。実際ここ二週間、まともに動けなかったんだがな」

上弦の壱との戦いの後、黒曜は意識を失った。

次に目覚めたのは一週間後蝶屋敷の自室だった。荒野で一人気絶していたところを隠に助けられ、運んでもらったという。それから目を覚まさない自分を付きっ切りで看病してくれた。

目を覚ました時、カナエには大そう泣かれてしまった。

そして、自分の変化に気づいた。

痣を失ったこと、そして、

「世界が透けて見えなくなった」

人の体を見通すことができなくなった。変化はそれだけではない。

体力も大きく落ち、呼吸の練度もそれまでとは比べ物にならないほどに稚拙。

刀は赫くならないし、当然呼吸を深めた所で痣は浮かばない。

旭那黒曜の戦闘力は極めて大きく下がってしまった。

「やっぱり……変わりますか?」

「あぁ。大きく違った。柱合会議の後、そのまま実弥と模擬戦になったんだが」

「えっ!? どうなったんですか!?」

風柱の不死川といえば柱でも屈指の実力の持ち主であると炭治郎の鼻が教えてくれる。水柱の義勇と互角に渡り合っている光景も目撃した。

その彼と大きく力を削れた黒曜が戦えば、

「あぁ――――――実弥に勝って、そのまま行冥と戦ったが普通に負けてしまった。解っていたが強いな彼は」

「弱くなってないのでは!?」

風柱に勝利し、黒曜を除けば柱最強であった行冥と戦えるとか。

弱体化とは一体。

いや、以前の黒曜であれば柱全員と戦ってもかすり傷一つ受けなかったことを考えれば、弱くなったと言えるのだろうか。

頬や首筋の絆創膏や包帯はその模擬戦の名残なのだろう。

「弱くなった。星の呼吸はもう使えない。旭の呼吸は使えたから、今後は旭柱だがな」

「……そういえば気になったんですけど、星の名は残さなくてよかったんですか」

星という言葉を黒曜が大切にしていたことを炭治郎は良く知っている。

人の輝きは星のように、と彼は常々言っていたのだから。

「あぁ」

黒曜は一つ頷き、木を削る手を止め炭治郎に視線を向ける。

「知っていたか炭治郎――――――異なる呼吸の併用はとても疲れるんだ」
「常識ですけど!?」
上弦の陸との戦いにおいて水とヒノカミ神楽の呼吸を同時に使い血涙まで流した炭治郎である。
元々星の呼吸は五大呼吸全てを併用統合したものだった。
通常黒曜の言う通り、呼吸の併用は異常に消耗するのだ。だから二つ以上の呼吸を戦闘で用いることはできない。それを行っていたが故に旭那黒曜はまさに異端だったのだ。
だが、痣を、透き通る世界を、赫刀を失った今、そんなことはできなくなってしまった。
あるのは父から受け継いだヒノカミ神楽によく似た旭の呼吸のみ。
「俺の旭の呼吸と炭治郎のヒノカミ神楽はよく似ているが、最後の型が違う」
「はい、師範と千寿郎君が解読してくれた継国縁壱さんは十三の型があったそうですが、俺は十二しか知りません。……師範のそれとは違うんですよね」
「あぁ。俺の最後の型は上弦の壱を倒すためのものだったからな」
故に、参考にはなるが、応えにはならない。
炭治郎のヒノカミ神楽の最奥は炭治郎自身で探さなければならなのだ。

黒曜は小刀の動きを再開する。
「俺は、継国縁壱の言葉を上弦の壱に託すために特別強かったんだ。彼に負けぬように。縁壱殿がずっと、ずっと、四百年間願い続けてきた祈りが旭那の家で受け継がれてきた」
兄上に。
ただただ、感謝の言葉を。
そして変わり果ててしまった彼に引導を渡すために。
その悲願は黒曜によって果たされた。
痣を失ったのはそういうことだろう。役目が果たされたから、縁壱から受け継がれた力はもう必要ないのだ。
「……うむ、どうだろうか」
「あの、師範。さっきから削ってたそれなんですか？」
「笛だ」
「……笛ですかぁ？」
お世辞にも、黒曜が削っていたそれはまともな笛には見えなかった。彼も初めて削ったからだろう。幼子が寺子屋で作るものとそう変わらない。
「むぅ……難しいものだ」
だが、と黒曜は微笑み、

「赤子が生まれるまで時間はある。その間、何度も試作を重ねるとしよう」
「ははぁ……どんなの作りたいんですか？」
「蝶の彫りものは欲しいな。今しのぶが着ている羽織のあれだ。できれば、俺の痣のような菱形も欲しい」
「難しそうですね」
「あぁ――――だが、時間はある。俺たちが作る」
　鬼との戦いは終わったわけではない。
　首魁である鬼無辻無惨が残っている。
「炭治郎」
「はい？」
「俺は、お前だと思っている」
　この戦いに終止符を打つのは。
　千年、四百年と連なる悲しみの連鎖はを断ち切るのは。
　日輪の心を持つ少年、竈門炭治郎を於いて他にはいないと。
「――――はい、全霊を尽くします」
「あぁ。それにほら、炭治郎は鬼との戦いが終わった後のことを考えているか？　何かやりたいこととか」

「えっ……うーん、正直あんまりないですね」
「そうなのか？　カナヲや真菰とはどうなんだ？」
「……い、意見を控えさせていただきます」
「そうか――――最終、二人とも娶るという選択肢もあるぞ？」
「天元さんにも勧められましたが！　それは、正直どうなのかと！　倫理的に！」
顔を真っ赤にして汗を流す炭治郎。
どうやらカナヲと真菰の猛烈な推しも効果を発揮していたらしい。どちらかを選ぶのか、どちらも選ぶのか、彼の未来がとても楽しみだ。
「おーい、黒曜くーん、炭治郎くーん」
ひょっこりとカナエが姿を現した。
即座に黒曜が立ち上がり、しっかりと立っていた彼女を無意味に支えた。
「カナエ！　無理をしてはいけない！」
「いや、まだそんな時期じゃないからね？」
旭那黒曜。
妻と子に対して無意味に過保護な男だった。
「……師範、なんか性格変わりましたか？」
「……そうか？」

「はい、なんか面白くなったような……」
「え？　黒曜君は昔から面白いわよ？」
「えっ……？」
「えっ？」
俺は面白かったのか……と黒曜は思った。
「だが、そうだな。……肩の荷は下りたよ。先祖の想いは遂げた。ならばあとは、俺が俺としての生を歩んでいくだけだ」
「勿論、私と、この子も一緒にね」
「――――あぁ」
全ての命に終わりは来るけれど。
だからこそ、生の輝きは愛おしく素晴らしい。
人の命は星のように煌いているのだから。
旭那黒曜は、星のように輝き、人として生きていく。

●

山奥の小さな村の外れ、小さな家に、少し音の外れた笛の音が響いていた。
大人二人と子供一人が並んで眠るのが精一杯の小さな居間。
眠りから目を覚ませば、すぐに家族が居て、手を伸ばせば届くようなそんな距離。
幼い子供が、美しい菱形と蝶の羽根の模様が彫られた笛を吹いていた。
彫刻は精密極まるのに、音は外れている。
父親の青年は呆然とし、母親の女性は涙を流すくらいに笑っていた。
その二人の子供は、そんな両親が不思議そうに見る。
母親譲りの薄紫の瞳。父親譲りの顔立ち。
その額に――――痣はない。
子が再び笛を吹きだす。
音の外れた、けれど確かな調べ。
青年も女性も、柔らかい笑みで子を微笑み見守る。
ささやかな幸せの音が響き鳴り渡る――――こくようのうた。

人物紹介＆ａｍｐ；呼吸

旭那黒曜
階級▪星柱↓旭柱
誕生日▪１２月１３日
年齢▪１９
身長▪１７５
体重▪７０
出身地▪群馬県
趣味▪楽器、双六、メンコ
好きなもの　妻、家族、人の輝き
備考：旭柱就任後の力量は行冥と同等の模様
　尚無限城戦において量産された鬼相手に透き通る世界と赫刀と痣に自力で到達した模様（それでも星柱時ほどの理不尽さはなかった）
　痣はなんとかなった。
　無惨様は改めて発狂した。

鬼との戦いが終わった後は、生家に戻りささやかな幸せを手に入れました。

星の呼吸・壱の型・明けの明星

相手の急所（鬼に放つため、首）、そこに最も威力が通る斬線を完璧に通して放つ型。斬撃を綺麗に通す、という極めて単純な技術ながら、透き通る世界から放たれる故に防御無視の一閃。

弐の型・紅玉の煉獄

炎の型の奥義煉獄を核に、それ以外の炎の型を同時に放つ。

頸が落ちるどころか、人型なら残さず蒸発する。

参の型・瑠璃の流転

流々舞い、水流飛沫の足運びで、捩じれ渦、水車の体の動きで、生々流転を行い、雫波紋突きの速さと滝壺の威力と攻撃範囲で、状況に応じて水面斬り、打ち潮、干天の慈雨を放つ。

肆の型・翠玉の風斬

全方位にて放つ真空の刃によって文字通り竜巻を生み出す。黒曜の放つそれは空間がズレたと思わせるもの。風の呼吸特有の剣技による攻撃と原理は同じだが規模威力が桁違い。人の形をした暴風雨。

伍の型・金剛の岩軀

唯一の防御技。自身の防御というよりも血鬼術による範囲攻撃から背後の仲間を守るための型。ひたすらに相手の攻撃を超高密度斬撃で弾き逸らすというもの。

陸の型・琥珀の霹靂

雷の呼吸・壱の型・霹靂一閃と全く同じの上位互換。神速のそのさらに先。曰く、雷の呼吸の真髄は壱の型であり、それ以外は余技というのが黒曜の言葉。

黒曜の放つそれは抜刀から納刀までが刹那であり、納刀した時にやっと鬼の頸が落雷に撃たれたように弾け断つ。

漆の型・紫晶の輪廻

水の呼吸の体捌きにて肉体に生じ得るエネルギーを一点に集中し、炎の呼吸にて放つ。あらゆる状況から五体の極限威力を放つ究極の質。

捌の型・橄欖の天嵐

風の呼吸と共に琥珀の霹靂を超連続で相手を囲むように叩き込む。

納刀と抜刀が繰り返され、生み出されるのは鬼を囲む斬撃の嵐。

数百数千に及ぶ究極の量。

玖の型・黒曜の星辰

五大呼吸統合。

炎のように激しく。水のように柔らかく。風のように鋭く。岩のように堅く。雷のように速い。

一閃に全ての呼吸の要素を織り交ぜた、人という種が放つ限界域。

一つの斬撃に全ての呼吸のエフェクトが同時に乗る。

旭の呼吸・奥義・曙光の戯れ・童歌

黒曜版日の呼吸、その奥義。

上弦の壱、黒死牟を斃す為だけの型。

黒死牟の放つ月輪をすべて斬り捨てる超高速高密度斬撃から、首を落とす本命の一閃を放つ型。

キメツ学園では歴史教師、吹奏楽部顧問。

カナエさんとは大学で出会い、その日に結婚した。

妻が学内でえげつない人気を誇るので、何かと「カナエは俺の嫁発言」を繰り返している。不純異性交遊推進派。恋のキューピッド気取り。

炭治郎に二股を推奨している。

カナエの退魔士の仕事を通して三回くらい日本を救っている。

入学した炭治郎を吹奏楽部に無理やり入れたが、彼の音楽センスに周りにはかなり苦情を受けている模様。同部所属真菰だけ喜んだ。
校内バレンタインチョコ獲得数ランク外。
カナエさんがいるので、彼女の本命チョコと一部義理チョコしかもらっていない。

人物評価
カナエ：最愛の人、天然で面白い。生まれ変わっても、もう一度愛し合いましょう。
炭治郎：強い、憧れの人。想いを託してくれた人
真菰：届かない人
カナヲ：あ、義兄さんより炭治郎の話していいですか？
しのぶ：姉を救ってくれた恩人
義勇：俺とは違う（完璧な人だが、しかしどこか性格が似通った者がある気がして他人のような気がしないし親近感を感じる。継子である真菰が自分より慕っている気がするし、さらにその真菰は炭治郎大好き過ぎて最近構ってくれないのがちょっと寂しい）
不死川：無駄な心配させんじゃねぇ!!　全然弱くなってねぇじゃねぇか!!
煉獄：つよい！　たのもしい！　わっしょい！

行冥：笛仲間、カナエと結ばれて泣き、子供ができてまた泣いた
無一郎：なんか親近感感じてたけど、それより炭治郎の話しない？
天元：地味に派手なことするやつ
蜜璃：素敵な人、幸せそうな結婚をした憧れの人
伊黒：職場結婚したのでとても羨ましい。口には出さないが滅茶苦茶祝福している。
善逸：爆発してほしい
伊之助：強い!!!!!!!!!!
無惨：キエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!!
黒死牟：縁壱!?　縁壱なんで!?
童磨：「」

縁壱…ありがとう

うた…幸せに！